リリカル龍騎ライダーズinミッドチルダ EXTRA

ロンギヌス

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

異世界ミッドチルダに降り立った、鏡の世界の仮面ライダー達。

様々な出会いを経て、彼等の運命は大きく変わっていく――――。

※リリカル龍騎ライダーズｉｎミッドチルダ（ｈｔｔｐｓ：／／ｓｙｏｓｅｔｕ．ｏｒｇ／ｎｏｖｅｌ／１４５８４１／）の外伝作品となります。今後、何か外伝ストーリーが唐突に思いついた時はこちらに投稿していこうと思っています。よろしくお願

いします。

目次

RIDER TIME 仮面ライダーエクシス
Chapter1 EXIS ― 1
Chapter2 REINCARNATION ―――― 17
Chapter3 SURVIVE 42
エクシスサバイブ設定&ストーリー解説（ネタバレ注意！）―――― 85
RIDER TIME 仮面ライダー???
in Mirror World
rorrim eht ni wod
ahS 話1第 ―――― 96
noisulli gniredna
W 話2第 ―――― 119
tsixe ot gninaem
eht 話3第 ―――― 138
仮面ライダーエンプレス設定&ストーリー解説（ネタバレ注意！）―――― 155

ＲＩＤＥＲ ＴＩＭＥ 仮面ライダーエクシス
Ｃｈａｐｔｅｒ１ ＥＸＩＳ

少年は、少女と出会った。
少年は、少女の為に戦い、そして散った。
しかし、少年の物語は、これで終わりではなかった……

「――――ん」

少年――――鈴木健吾（すずきけんご）は歩いていた。

薄暗い空間の中を、彼は俯いたまま先へと進み続けていた。しばらく歩き続けた後、健吾は歩みを止め、静かに顔を上げる。虚ろだった両目は、少しずつ光を取り戻し始めていた。

「……!?」

健吾はハッとした表情を浮かべ、周囲を見渡す。彼の周囲は今もなお、薄暗い闇が広がっていた。

（何だ……何処なんだここは……？　僕は確か、あの男にやられて……）

健吾の記憶が、少しずつ呼び起こされていく。

ミッドチルダという、地球とは違う世界。

そこで出会った1人の少女。

その少女と共に過ごしてきた日々。

ミッドで初めて出会った仮面ライダー達。

かつて地球で自分を殺した眼帯の男。

ミッドで遭遇した仮面ライダーのような戦士。

ミッドで自分を殺した凶悪な殺人犯。

そして雨の降る中、1人孤独に息絶えていった自分自身。

（そうだ……僕は、死んだんだったな）

健吾は記憶がハッキリしてくると同時に、自らの死を理解しつつあった。しかし腑に落ちない点もあった。

死んだのであれば、何故自分は今もこうして意識が残っているのか。もしかして、ここは死後の世界なのか。

わからない事だらけだったが、それは健吾にとって、大した問題ではなかった。

ここが何処だろうと関係ない。死んでしまったのであれば、今更どう足掻いたって何の意味もないのだから。

（……ラグナちゃん）

それでも、未練がないかと言えば嘘にはなる。

初めてミッドにやって来た時、倒れていた自分を拾ってくれた少女。死してなお、健吾は彼女の事が忘れられずにいた。

（元気にしてるかな……）

できる事なら、最後にもう一度会いたかった。

できる事なら、彼女に一言謝りたかった。

でも、それはもう叶わない願いだった。それ故、健吾は足掻こうとは思わなかった。

自分はもう、二度と彼女に会える事はないのだからと。彼は自分にそう言い聞かせた。
（ごめんね、ラグナちゃん……）

『諦めるのか？』

（――――！）
声がした。
聞こえてくるはずのない声を、健吾の耳は確かに聞き取った。
（誰だ……？）
『本当に、お前はここで諦めるのか？』
（何だ……何が言いたい……？）
男の声だった。それが誰の声かなんて、当然わかるはずもなかった。
『まだここで終わりじゃない』

（何……？）
『最後に1つだけ、やって貰いたい事がある』
「……ッ!?」
その時、周囲の闇が静かに消え去っていく。それにより、健吾は自分が今いる場所を知る。そこは、健吾も見知った景色――――ミッドチルダだった。
「ここは……!?」
誰もいない、音もしないその街は、まるでミラーワールドのように静かだった。ミラーワールドと違うのは、文字などは反転していない事と、空が血のように赤い事。
「何でここに……それに、空が赤い……」
ますますわからなくなってきた健吾だったが、ひとまず歩みを再開させ、誰もいない街中を進んでいく。人間どころか犬や猫、鳥などの動物もいないその世界は驚くほど静かで、不気味な世界だった。
（さっきの声は、一体誰が……）
先程の声は聞こえなくなっていた。声の主は一体何者なのか。健吾は首を傾げつつ、たまたま目に入った喫茶店のある方向へと歩み続けようとした……その時。
「ひいいいいいっ!?」
「!?」

喫茶店の近くの狭い路地から、何者かが飛び出して来た。思わず身構える健吾だったが、それが人間の男性であるとわかりすぐに構えを解く。その太った白髪の男性はと言うと、健吾の存在に気付き大急ぎで飛びついて来た。

「おぉ、良かった!! 僕以外にも人がいたんだな……!!」

「ア、アンタ、生きてるのか? それとも……」

「ええい、この際ガキでも構わん!! 頼む、僕を守ってくれ!! 金ならいくらでも出してやるから!!」

男性は何かに怯えた様子で健吾に縋りつき、とてもまともに会話できる状態ではなかった。一体何なのかと困惑する健吾だったが、その理由はすぐに理解させられる事となった。

『フンッ……!!』

「ひぃ!? き、来たぁっ!!」

「!? アレは……!!」

狭い路地から姿を見せたのは、素顔を仮面で隠した謎の存在だった。2本の角を生やしたその存在は、黒と銀色のボディを持ち、その上に赤い装甲とマントを纏っていた。そして健吾の目についたのは、その謎の存在が腰に身に着けている赤いベルトだった。

「まさか、仮面ライダー……!?」

「い、良いか君!!　頼むから私を守るんだぞ!!」

その謎の戦士――――〝仮面ライダータイラント〟の特徴など知る由もない健吾は、彼の後ろに隠れて身を守ろうとする太った男性を連れて下がろうとしたが、それより前に動き出したタイラントが左手に赤い弓型の武器を構え、弓を引いて矢を放った。

『フッ!!』

「うわっ!?」

「ぎゃひぃっ!?」

放たれた矢は健吾と男性の足元に命中し、その衝撃で2人は同時に地面を転がされる。健吾が喫茶店の壁に背中を打ちつける中、太った男性の方にはタイラントが接近しようとしていた。

「ま、待て、やめろ!!　僕を誰だと思ってるんだ!!　僕に手を出せばタダでは済まな――――」

『フン!!』

「ぎゃあっ!?」

「なっ……」

タイラントはその赤い弓――――ソニックアローの鋭利な刃を振り下ろし、太った男性は斬られると同時にその体が一瞬で消滅。そこに残されたのは青白い人魂のような何

かだけで、ふよふよと宙に浮かんでいるその人魂が、どこかに吸い寄せられるように飛び去って行く。

「消えた……!? 一体何を――――」

しかし、考えている暇はない。人魂が何処かに飛び去って行ったのを確認したタイラントが、次の標的として健吾に狙いを定めたからだ。タイラントはソニックアローを構え、健吾に向かって再び矢を発射した。

『ヌンッ!!』

「くっ!?」

ギリギリのタイミングで起き上がれた健吾が横に転がり、彼が立っていた場所に矢が着弾する。突然の襲撃者に対し、健吾はこの状況を打破できる方法を必死に考え始める。

（マズい、このままじゃ殺られる!! 何とかアイツから逃げ切るしか……!!）

選択肢は逃走の１つのみだった。当然だ。生身の状態で戦うなど自殺行為でしかない。そう判断した健吾だったが……そんな彼の目に、ある物が映り込んだ。

「――――え」

先程、自身が矢を避ける前に倒れ込んでいた場所。そこにある物が落ちていた。

（な、何で……）

その落ちていた物の正体を、健吾は嫌と言うほど知っていた。というか、忘れられるはずもなかった。

「何で、これがここに……!?」

狐の顔を象った金色の紋章が特徴的な、黒いカードデッキ。この場には存在しないはずの代物が、何故か健吾の視界の先には存在していたのだ。

それが何故ここにあるのか、健吾にはわからなかった。

しかしそれを見た瞬間から、健吾の行動は早かった。

『ハァッ!!』

「ッ!!」

再度ソニックアローの矢が飛び、健吾はそれを回避してからカードデッキを素早く拾い上げる。そして立ち上がった彼はカードデッキを左手に持ち、喫茶店の扉の窓ガラスに向けて突き出す。すると窓ガラスの中から銀色のベルトが出現し、それが健吾の腰に装着された。

「!! 出た……!!」

後はもう、やる事は1つだけ。振り下ろされて来たソニックアローの斬撃をかわし、タイラントを蹴りつけ後退させた健吾は、右手の拳を握り親指を立ててから、それを下に向けてサムズダウンを行い……あの台詞を叫んだ。

「――――変身！」

カードデッキをベルトに装填し、健吾の体に複数の鏡像が重なっていく。そして健吾の姿は一瞬にして、狐のような特徴を持ったオレンジ色の戦士――――〝仮面ライダーエクシス〟へと変化した。

「でやぁっ!!」

『グゥ!?』

エクシスは左腕のマグニバイザーを突き出し、タイラントの胸部装甲に命中させる。タイラントが怯んだ隙にエクシスはデッキから1枚のカードを抜き、マグニバイザーの装填口に挿し込んだ。

≪ＳＷＯＲＤ　ＶＥＮＴ≫

（色々訳がわからない状況だけど……コイツだけはここで倒した方が良い!!）

エクシスは構えたマグニブレードを振るい、タイラントのソニックアローと衝突する。そこから鍔迫り合いの状態が少し続いた後、エクシスがタイラントを蹴りつけ、体勢の崩れたタイラントを力強く斬りつける。すかさず反撃に動こうとするタイラントだったが、ソニックアローの大振りな攻撃をエクシスに回避され、続けて背中も斬りつけられる。

『グワッ!?』

（よし、行ける!! これなら……!!）
しかし、エクシスの奮闘もそこまでだった。
ズバァンッ!!
「ぐあぁっ!?」
突如、大きな斬撃音が鳴り響き、エクシスの背中に強烈な痛みが襲い掛かった。地面に倒れたエクシスが振り向いた先には、タイラントとは違う別の仮面ライダーが立っていたのだ。
「な、もう1人……!?」
『フッ……』
エクシスを背後から斬りつけたその仮面ライダーは、赤と黒の装甲に緑色の複眼、そして背中にマントを装備しており、皇帝を彷彿とさせる姿をしていた。その腰には蝙蝠のような機械的な生物がぶら下がっている。
（2対1か……ちょっとヤバいかも……!!）
『……ハァッ!!』
皇帝のような特徴の戦士――〝仮面ライダーダークキバ〟はその手に構えていた長剣――ザンバットソードを大きく振り上げ、再びエクシスに斬りかかって来た。エクシスは素早くマグニブレードで防御するも、今度はエクシスの左側からタイラントが

ソニックアローで矢を放ち、エクシスのボディに命中させる。
「がああああああっ!?」
矢が直撃したエクシスは路上を何度も転がされ、うつ伏せの状態で倒れ込む。そこにタイラントとダークキバがそれぞれの武器を構え、エクシスを始末するべく迫り来ようとしていた。
（マズい、このままじゃ……!!）

「やれやれ、世話の焼けるガキだな」

《ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ……ＢＬＵＳＴ！》
『『グガァッ!?』』
「……え？」
　謎の銃撃音と共に、タイラントとダークキバの装甲から火花が飛び散る。突然の事態に思わず呆けてしまったエクシスの前に、また別の仮面ライダーがシュタッと着地する。
「しようがない、手を貸してやる。今はお前に倒されると困るからな」
「……アンタ、誰だ？」
「俺か？　俺は……」
　白いデバイスから弾丸を放ったその戦士は、マゼンタ色のボディを持ち、緑色の複眼を怪しく光らせていた。その腰に装着されているのは、複数の紋章が描かれたマゼンタ色のドライバーで、そこには英語で『ＤＥＣＡＤＥ』と描かれていた。

「通りすがりの仮面ライダーだ、覚えておけ」

マゼンタ色の戦士――――〝仮面ライダーディケイド〟はそう告げてから、白いデバイス――――ライドブッカーから弾丸を発射したのだった。

場所は変わり、とある民家。

「う、んん……」

今ここには、この場にはいないはずの……この場にいてはいけないはずの人物が存在していた。

「ッ……健吾、さん……」

ベッドの上で眠る1人の少女。その口から、健吾の名前が呟かれる。

その時、閉ざされている少女の目からは、一筋の涙が零れ落ちていた……

To be continued……

Chapter2 REINCARNATION

「仮面ライダーって……アンタも……？」
「まぁ待て。質問には答えてやるが、まずは邪魔者を片付けるのが先だ」
『『グゥッ!?』』
窮地に陥っていたエクシスの前に駆けつけた戦士、仮面ライダーディケイド。ライドブッカー・ガンモードの弾丸が連射され、タイラントとダークキバが怯んだ隙にディケイドは腰に装着しているネオディケイドライバーのバックルを展開。ライドブッカーから取り出した1枚のカードを装填する。
「変身」
≪KAMEN RIDE……GAIM!≫
≪オレンジアームズ！ 花道・オンステージ！≫
ディケイドの頭上に出現したファスナーのような裂け目から、果物のオレンジを彷彿とさせる鎧が降下し、ディケイドの頭に被さった後、ディケイドのボディも青いスーツに変化。オレンジのような鎧が展開されて装甲となり、その中から鎧武者のような仮面が露わになる。変身が完了されると共に、周囲に果汁のようなエフェクトが飛散してい

く。

「……オレンジ？」

「フッ」

オレンジの装甲を纏った鎧武者の戦士――――〝仮面ライダーディケイド鎧武（がいむ）〟は手元に出現した刀のような武器――無双セイバーの刀身をひと撫でしてから、タイラントとダークキバに向かって斬りかかる。すかさず迎撃しようとする2人のライダーだったが、それよりもディケイド鎧武の方が動きが速かった。

「遅い……!!」

『『グオァ!?』』

武器を振り上げた2人の間を擦り抜けるように通過し、2人同時に斬りつけるディケイド鎧武。続けてその左手にはオレンジの櫛形切りのような刀身を持つ刀剣型武器――大橙丸（だいだいまる）を構えてダークキバのザンバットソードを高く弾き上げ、体勢が崩れたところに無双セイバーとの二刀流による斬撃を炸裂させる。

「！　おっと」

『ガァッ!?』

直後、離れた位置でソニックアローを構えているタイラントに気付いたディケイド鎧武は、その場に倒れ込む事で飛んで来る矢を回避。その際、無双セイバーの鍔部分のト

リガーを引き、無双セイバーの銃口から数発の弾丸を連射。タイラントの装甲に全弾命中し、怯んだタイラントがその場に膝を突いた。
「どうした、その程度か？」
『ヌゥ……グォッ!?』
ディケイド鎧武の挑発に反応したダークキバが再び襲い掛かろうとするが、そこに横方向から飛んで来たマグニブレードの斬撃が命中。ダークキバが振り向いた先には、マグニブレードを投擲した張本人であるエクシスが立ち上がり、マグニバイザーにカードを装填しようとしていた。
「お前の相手は僕だ……!!」
≪ＡＤＶＥＮＴ≫
『『グギャアゥ!!』』
「ヌォッ!?」
電子音を合図に、喫茶店の窓ガラスからエクシスの契約モンスターであるマグニレェーヴ、マグニルナールの２体が出現。２体がダークキバを抑えている間に、ディケイド鎧武は無双セイバーの柄部分に大橙丸をドッキングさせてナギナタモードにした後、ネオディケイドライバーにカードを装填する。
≪ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ……ＧＡ・ＧＡ・ＧＡ・ＧＡＩＭ！≫

「これで終わりだ……フンッ!!」
『!?　ヌゥッ!?』
　ディケイド鎧武が無双セイバー・ナギナタモードから斬撃を飛ばし、それを受けたタイラントの全身がオレンジ状の炎に包まれ拘束される。そこにディケイド鎧武が駆け出し、まるでオレンジをカットするかのように、すれ違い様にタイラントの胴体を一閃した。
「ハァァァァァァァァァァァッ!!」
『グァァァァァァッ!?』
　ディケイド鎧武の必殺技――――ナギナタ無双スライサーにより、オレンジ状の炎もろとも真っ二つになったタイラントが跡形もなく爆散。ディケイド鎧武は変身が解除され、通常のディケイドの姿に戻った。
「はぁっ!!」
『『グガァウ!!』』
『グ……ゴァッ!?』
　一方で、エクシスも自身の契約モンスター達と共に、ダークキバを追い詰めていた。エクシスがマグニバイザーでダークキバを殴りつけ、マグニレェーブが磁力でダークキバを吹き飛ばし、その先に先回りしていたマグニルナールがダークキバを力強く蹴り飛

ばす。ダークキバが地面を転がる中、エクシスがトドメに移る。

≪ＦＩＮＡＬ　ＶＥＮＴ≫

『グガァァァァウッ!!』

ファイナルベント発動と共に、マグニレェーヴとマグニルナールが融合し、巨大なマグニウルペースの姿に変化。咆哮を上げるマグニウルペースの手前にエクシスが移動し、その場で跳躍すると同時にマグニウルペースがエクシスの背中に光弾を当て、磁力による反発でエクシスをダークキバ目掛けて一直線に突っ込ませた。

「おおおおおおおおおおっ!!」

『グワァァァァァァッ!?』

エクシスの必殺技――グラビティスマッシュが決まり、ダークキバもその場で爆発し消滅。着地したエクシスは一息ついた後、ディケイドの方へと振り返った。

「ほぉ、なかなかやるじゃないか」

「……アンタには聞きたい事が山ほどある」

飄々とした口調のディケイドに対し、共闘したとはいえ警戒心を解く事はしないエクシス。彼からすれば、相手は正体不明の謎の人物なのだから、そうなるのも無理のない事だった。

「アンタは一体何者だ。それにここは一体何処なんだ。アンタなら、何か知っているん

じゃないのか？」
「残念だが、今はまだ答えられないな」
「……質問に答えてくれるんじゃなかったのか？」
最初に言っていた事と話が違うではないか。声色を変える事でその不満と苛立ちを伝えるエクシスだったが、ディケイドが質問を拒否したのには理由があった。
「言っただろう？　邪魔者を片付けるのが先だと。まだ邪魔者がいる」
「何……ッ!?」
ディケイドがそう告げた直後、２人の周囲の地面から黒い触手のような物体が何本も出現し、２人に向かって一斉に襲い掛かって来たのだ。驚いたエクシスは慌てて回避する中、襲撃を予知していたディケイドは慌てず冷静に攻撃を回避し、自分に当たりそうな触手だけをライドブッカー・ソードモードで切断する。
「今度は何だ……!?」
「現れたな。この騒ぎの元凶が」
『――――ヒ、ヒヒヒ』
ライドブッカー・ソードモードの刀身を撫でながらそう告げるディケイドの視線の先で、彼に斬られた触手の切断面から人型のような何かが現れ、地面にドチャリと音を立てて落下する。全身が触手に覆われているその異形は、頭部の触手の隙間から赤く鋭い

目を露わにさせた。
『いた……ここにもいたなぁ……死者の亡霊だぁ……ヒヒヒヒヒ』
「……ッ!?」
全身が触手に覆われたその異形――――〝ベルグ変異態〟は、エクシスの姿を見て不気味な声で笑い出す。エクシスは寒気のような物を感じたのか、異形の姿を見て思わず体が硬直してしまっていた。
「お前だな。死んだ者達の魂を喰って回っているのは」
『……んん～？　お前、生きているのかぁ……？　何故生きた人間がここにいる……ヒヒ、まぁ良いかぁ♪』
ディケイドに対しては不思議そうな様子で首を傾げるベルグ変異態だったが、特に疑問を解決しようという意志はないようで、再び楽しそうに笑いながら、その両腕から複数の触手を伸ばし始めた。
『貴重な魂だぁ……お前も、私の生贄となれ……!!』
「チッ……来るぞ!!」
「うわっ!?」
ベルグ変異態が鞭のように振り下ろして来た触手を、ディケイドとエクシスは左右に転がって回避する。しかしその間に、ベルグ変異態はどこからか拳銃型のデバイスを取

り出した。
『ヒヒヒ、逃がすものかぁ……!!』
「!?　それは……!!」
≪ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ……ＰＯＳＥＩＤＯＮ！≫
≪ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ……ＢＬＯＯＤ！≫
≪ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ……ＦＡＬＣＨＩＯＮ！≫
ディケイドが驚く中、ベルグ変異態は構えた拳銃型デバイス――――試作品型ディエンドライバーに３枚のカードを連続で装填し、不気味な電子音と共に３人の仮面ライダーを召喚する。
複数の海洋生物の意匠が特徴的な、赤い槍を武器として構えた仮面ライダー。
頭部にドラゴン、胸部にコブラの意匠を持ち、マントを装備した仮面ライダー。
黒とオレンジ色のボディを持ち、その手に漆黒の剣を構えた不死鳥のような仮面ライダー。
それぞれ〝仮面ライダーポセイドン〟、〝仮面ライダーブラッド〟、〝仮面ライダーファルシオン〟と呼ばれる戦士を召喚したベルグ変異態は、彼等に指示を下す。
『さぁ行け、異世界のライダー達よ……!!』
『『『ハァッ!!』』』

「異世界のライダー……!?」
「たく、また面倒な事をしてくれる……!!」
　３人の仮面ライダー達が一斉に襲い掛かり、エクシスはファルシオンと、ディケイドはポセイドンとブラッドを相手取る形となった。エクシスがファルシオンの振るう長剣をかわし、ディケイドがポセイドンの振るう槍をライドブッカーで受け止めながらブラッドを蹴りつける中、ベルグ変異態は試作品型ディエンドライバーにまた別のカードを２枚連続で装填する。
　≪ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ……ＩＬＬＵＳＩＯＮ！≫
　≪ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ……ＢＬＵＳＴ！≫
『喰らえぇ……ヒヒャハハハハァッ!!』
「な……うわぁぁぁぁぁっ!?」
「くっ!?」
　電子音と共に、ベルグ変異態はその場で複数の分身を生み出し、それらが一斉に試作品型ディエンドライバーから無数のエネルギー弾を連射。エネルギー弾はまるで雨のようにエクシスとディケイドの周囲に降り注ぎ、エクシスは地面を転がされ、ディケイドは倒れかけながらも何とか体勢を保ってみせた。
「マズいな……おい、ここは一旦引くぞ！」

≪ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ……ＩＮＶＩＳＩＢＬＥ！≫

『ヒヒヒ、逃がすかぁ!!』

ネオディケイドライバーにカードが装填され、ディケイドは右手でエクシスに触れる。すると２人の姿が一瞬で透明化し、ベルグ変異態がそこに銃撃を仕掛けるも、２人はその場から完全に姿を消してしまった。

『逃げたか……まぁ良いだろう、すぐに見つけ出してやる……私の目的の為にもな……ヒッヒッヒッヒッヒ♪』

「おい、大丈夫か？」
「はぁ、はぁ……」
　戦闘が終わってから数十分後。ディケイドはエクシスを連れてとある一軒家の前まで避難し、そこで戦いの疲れを取るべく体を休めていた。変身を解いた健吾は疲労のあまり地面に座り込む中、まだ体力に余裕があるディケイドは今も立った状態で周囲を見渡していた。
「奴もすぐには見つけられまい。ようやく話ができるな」
　ネオディケイドライバーのバックルを開き、ディケイドは変身を解除する。その姿はマゼンタ色のシャツに黒スーツを着た茶髪の男に変化し、その首元にはマゼンタ色のトイカメラを吊り下げていた。
「門矢士だ。お前は鈴木健吾、仮面ライダーエクシスで間違いないな？」
「……何で僕の名前を？」
「お前だけじゃない。他のライダー達の事も、大体はわかっている。それから、今いるこの世界の事もな」
　トイカメラを構えた茶髪の男――――〝門矢士（かどやつかさ）〟は、トイカメラのレンズを健吾に向けてからカチッとシャッターを切り、天を指差す。天は今もなお、不気味な赤色に染まっ

ていた。
「ここは生と死の狭間の世界だ」
「生と死の、狭間の世界……」
「あぁ、言っておくが俺はまだ死んでないからな」
「へ？　じゃあ何でアンタはここに……」
「さぁな。何だって良いだろ」
「いや良くないでしょ」
　大体わかってるんじゃなかったのか。そんな健吾の冷静な突っ込みをスルーし、士は話を続けた。
「まぁとにかくだ。死んだ者の魂は皆、この狭間の世界を介して黄泉の国へと向かう。それがこの狭間の世界における基本的なルールだった……が、今は少し状況が違う」
「……どういう事？」
「不思議に思わないか？　死者の魂で溢れかえっているはずのこの世界が、何故これほどまでに静かなのか」
　士にそう言われて、健吾は改めて不思議に感じた。
　彼が言う通り、辺りがあまりに静か過ぎる。士の説明通りなら、この狭間の世界には死者の魂がたくさんいてもおかしくないはずなのに、ここにやって来るまでの間、死者

の魂はあの太った男性くらいしか目撃しなかった。それ以外の死者の魂は一体どこに行ったのだろうか。

「お前も見ただろう、さっきの怪物を。この狭間の世界にやって来た死者の魂を、奴が何人も喰らっているのが原因だろう」

「！　だからあの時……」

健吾は唯一出会った死者である太った男性が、タイラントに斬られて人魂のようになった光景を思い出す。アレも恐らく、太った男性の魂がベルグ変異態に吸収されてしまったのだろうと、健吾は理解できた。

「このままでは、死者の魂は輪廻転生すらできず、奴の養分として扱われる事になる。そうして奴はどんどん力を蓄えていくのさ……そこでお前に声をかけた」

「……僕が仮面ライダーだから？」

「察しが良いな。お前は死んでから結構な時間が経過しているはず。にも関わらず、お前は黄泉の国に行かず、この狭間の世界を未だ彷徨い続けている。ライダーバトルにも参加していたくらいなんだ。生きていた頃の未練が相当強いと見た」

「ッ……」

〝未練〟という言葉に、健吾は士から視線を逸らす。その様子を見て、士は小さく鼻を鳴らした。

「心当たりがありそうだな」
「……アンタに何がわかる」
「わかるさ。大体な」
士は何の躊躇いもなくそう言ってのけ、健吾は彼を強く睨みつける。それでも士は涼しい顔を浮かべており、再びトイカメラのシャッターを切った。
「そのおかげで、お前は死んでもなおライダーの力を持ち続けている。あの怪物を倒す為にも、お前には少しばかり協力して貰うぞ」
士はそう言って、座り込んでいる健吾に手を差し伸べる。しかし健吾は再び視線を逸らす。それは協力する事を拒んでいるかのような反応だった。
「手伝わないのか?」
「……今更、僕に何ができるのさ。アッサリ死んでしまうような僕なんかに」
救いたかった妹も救えず、ライダーバトルから脱落した。
ある兄妹の平穏を守ろうとして、因縁深き宿敵にアッサリ返り討ちにされた。
二度も死を迎えている事から、この時の健吾は自分に対して自信を失ってしまっていた。それ故に、士からの協力要請にも応えようという意志はなかった。
しかし士からすれば、それも想定の内だった。
「……お前にはもう1つ、伝えておかなければならない事がある」

「？」

「付いて来い。その為にお前をここまで連れて来た」

士は一軒家の玄関の扉を開け、中に入って行く。それを見て、ハッと気付いた健吾は思わず立ち上がった。

「ッ……ここは……」

戦いの疲労と、士との会話で最初は気付いていなかった。玄関の前にある名札プレートを見た事で、健吾はようやく思い出したのだ。

その一軒家が、かつて自身が世話になった兄妹――グランセニック家の自宅だったのだから。

「ここだ」

士が通路の階段を上がって行き、健吾も慌ててその後に続いて行く。そして2階のとある部屋に辿り着き、士が何の遠慮もなく部屋の扉を開けると、そこには健吾にとって

予想外の人物がいた。
「ッ!?　ラグナちゃん!?」
　健吾は部屋のベッドで眠りについている少女――――〝ラグナ・グランセニック〟の傍まで駆け寄った。健吾が肩を優しく揺すっても、彼女は全く起きる様子はなかった。
「どうして彼女がここに……!?」
　まさか、彼女も自分と同じように死んでしまったからここにいるのか。健吾は思い付く限りの中で一番最悪な可能性を考えてしまうほど動揺してしまっていたが、その可能性は健吾の後ろに立っていた士が否定した。
「その娘はまだ死んではいない。だが、安心できる状態でもない」
「どういう事だ……!?」
「言っただろう?　ここは生と死の狭間の世界だと。その娘は死んでこそいないが、死んでもおかしくない状態にある。つまり、現実世界のその娘は今、生と死の境を彷徨うほどの事態に陥っているという事になる」
　生と死の境を彷徨うほどの事態。一体、現実世界で彼女の身に何があったというのか。未だ起きる様子のないラグナを心配そうに見つめる健吾だったが、今の彼には彼女にしてやれる事は何1つとして存在していなかった。
「今その娘してやれる事は何もない。精々、その娘が死なないよう祈る事くらいだろう

な」
「ッ……ラグナちゃん……!!」
「1つわかっているのは、このままあの怪物を放置しておくのはマズいという事だ」
健吾が確実にその気になるように。ここで士は、更に畳みかける事にした。
「あの怪物が死者の魂を喰らってまで力を蓄えているのは、現実世界に侵攻する為だ。アレほどの怪物が現実世界で暴れようもんなら、更に犠牲者は増える事だろう。そうなれば、その娘の命もいよいよ危ない」
「……ッ!!」
「もう一度言うぞ。奴を止めるのに協力しろ。これからも、その娘に生きて欲しいのならな」
士にそう言われてしまっては、もう反論の余地はない。健吾が何も言えず言葉に詰まった時だった。
「――――て」
「!」
微かに聞こえて来た声。2人がラグナの方へと視線を向けると、ラグナは眠りについたまま、その口元だけが僅かに動いていた。その目からは、ほんの僅かに涙の粒が流れ落ちていた。

「助けて……健吾、さん……」

「……！」

ラグナが健吾の名前を呼んでいる。健吾に助けを求めている。それを認識したその瞬間、健吾の脳裏に過去の記憶が呼び起こされた。

ラグナと共に過ごした時間。

楽しそうに笑っているラグナの顔。

（ラグナちゃん……）

『お帰りなさい、健吾さん！』

「――――ふうううう」
小さく息を吹き出す健吾。彼の中で、覚悟は決まっていた。
「……あの怪物」
「うん？」
「……あの怪物を倒せば良いんだよね？」
「……協力を頼んでいる俺が言うのも何だが、良いのか？　奴を倒したところで、別にお前が生き返れる訳ではないんだぞ」
「そんな事はとっくにわかってる」
ラグナの目元の涙を優しく拭い、立ち上がる健吾。士のいる後ろに振り向いた彼の目には、既に迷いは微塵も存在していなかった。
「どうせ二度も死んだ身だ。今更迷う事なんてない。何だってやってやる……ラグナちゃんの生きている世界を、アイツの好きにはさせない」
「……良い目になったな」
士は小さく笑みを浮かべた後、懐から取り出した1枚のカードを健吾に投げ渡す。
「！　これは……？」
「使うと良い。そのカードがお前を……仮面ライダーエクシスをより強くする」

士が健吾に投げ渡したカード。
それは赤い炎の中、金色の翼が煌めいていた。

「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!?」
狭間の世界、とある立体駐車場。複数の車が駐車されているその内部にて、女性の悲鳴が大きく響き渡った。

『ヒヒヒヒヒ……逃がさんぞ小娘ぇ……』
「はぁ……はぁ……い、いや、来ないで……ッ!!」
青色のスーツを着た眼鏡の女性が、恐怖に怯えながら必死に走っている。その後ろからは、ベルグ変異態が両腕の触手を伸ばしながら迫り来ようとしていた。
「助けて……助けて、お父さん……あっ!?」
必死に逃げる眼鏡の女性だったが、彼女の右足に1本の触手が巻きつき、その場に転倒してしまう。そこにベルグ変異態が追いつき、右手の触手で彼女を引き寄せようとする。
『おや、鬼ごっこは終わりかな？　では諦めて……この私の一部となれ!!』
「ひぃ!?　い、嫌!!　誰か……誰か助けてぇっ!!」
眼鏡の女性が助けを求めて叫ぶ中、ベルグ変異態は左腕の触手も伸ばし、それを眼鏡の女性に向かって伸ばしていく。触手の鋭利な先端が、眼鏡の女性を刺し貫こうとした……その時。
ズドドドドォン!!
『ヌォウッ!?』
「――――え？」
どこからか飛んで来た数発の弾丸が、眼鏡の女性を刺そうとした触手を撃ち抜いた。

更にはベルグ変異態の胴体にも数発ほど着弾し、怯んだベルグ変異態が僅かに後退する。
「そこまでにしておけ」
『!!　貴様かぁ……ッ!!』
　ベルグ変異態が振り向いた先には、ライドブッカー・ガンモードを構えている士の姿があった。士がライドブッカーを指でクルクル回転させている中、眼鏡の女性の元にはマグニブレードを構えた健吾が駆け寄った。
「あ、あなた達は……？」
「アイツは僕達が引き受けます、あなたは逃げて下さい！」
　健吾は眼鏡の女性の右足に巻きついていた触手を、マグニブレードの刃で切断。これで眼鏡の女性は自由になり、健吾は彼女を逃がしてから士の隣に並び立ち、ベルグ変異態を睨みつける。
『また会ったな小僧……私に喰われる覚悟はできたようだなぁ……♪』
「残念ながら違う」
『んん……？』
「ここでお前を倒す……その為に僕はここに立っている!!」
　健吾は近くの車の窓ガラスにカードデッキを向け、その腰にベルトを装着する。それ

を見たベルグ変異態は愉快そうに笑い始めた。
『ヒヒャハハハハハハ!! 面白い冗談を言うものだなぁ!! そんな若さで死ぬような小僧に、一体何ができるというのだ……!!』
『『『フッ』』』
ベルグ変異態が試作品型ディエンドライバーを取り出すと、彼の周囲にポセイドン、ブラッド、ファルシオンの3人の仮面ライダーが姿を現す。それを見てもなお健吾は臆する様子は見せず、その隣に立っていた士もネオディケイドライバーを腰に装着し、ディケイドの顔が描かれたカードを取り出しながら口を開いた。
「少なくとも、お前を止める事ならできるだろうさ」
『あぁ?』
「俺はこれまで、死してなお世界の為に戦おうとしたライダーを知っている。自分が死ぬとわかっていて、自分より世界を優先したライダーを知っている」
『貴様、何が言いたい……?』
「わからないか? コイツの覚悟も、お前如きが計り知れるような物じゃないという事だ」
『フン、下らん!! ならば生きている貴様は何だと言うのだ……!!』
「俺は通りすがりの仮面ライダー。そして…… 〝世界の破壊者〟だ。覚えておけ」

「お前の野望は……僕達が打ち砕く!!」

士はネオディケイドライバーのバックルを開き、その隣では健吾が右手でサムズダウンのポーズを取る。そして2人は高らかな声で、あの台詞を叫ぶ。

「「変身!!」」

≪ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ……ＤＥＣＡＤＥ！≫

士はネオディケイドライバーにカードを、健吾はカードデッキをベルトに装填。士の周囲に現れたシルエットが彼と一体化し、健吾の全身にはいくつかの鏡像が重なり、2人はそれぞれディケイド、エクシスへの変身を完了させた。

『面白い……ならば2人纏めて、この私の糧になって貰うとしよう!!』

『『『ハァッ!!』』』

ベルグ変異態が試作品型ディエンドライバーで天を撃ち、それを合図に彼が召喚したライダー達が一斉に武器を構えて動き出す。それを見たディケイドはソードモードに切り替えたライドブッカーを、エクシスはマグニブレードを構えて戦闘態勢に入る。

「行くぞ健吾……!!」

「はい!!」

2人は同時に駆け出し、襲い来る3人のライダー達と激突。今ここに、今を生きる人間達の未来を懸けた、激しい戦いの幕が開こうとしていた。

To be continued……

Chapter3　SURVIVE

時は少し遡り、現実世界……

「うっひゃあ、すっごい雨……！」
「傘、持ってて正解だったね」
「全くだな」
　この日、ミッドチルダは土砂降りの雨だった。雷鳴も時折鳴り響く中、夕飯の食材の買い出しに出ていたグランセニック兄妹と、その道中でたまたま出会った夏希の3人は傘を差しながら、川の上の橋を渡りグランセニック家の自宅に帰ろうとしているところだった。
「あ～も～最悪。天気予報じゃ雨は降らないって言われてたのに……」

「ま、天気予報も外れる時はあるもんさ。できれば家に着いてから降ってきて欲しかったもんだがな」
「……はぁ」
「あれ、どしたのラグナ？」
　歩いている途中で立ち止まり、どこか元気がなさそうに溜め息をつくラグナ。それに気付いた夏希も立ち止まり、夏希が声をかける。
「あぁ、えっと……私、雨の日が好きじゃなくて」
「まぁ、雨に打たれるのが好きな人間はそうそういねぇだろうな」
「土砂降り過ぎて、傘差してるのに現在進行形で濡れてるもんね」
「それだけじゃなくて……あの人がいなくなった日も、こうして雨が降っていたから」
「「……！」」
　それを聞いて、夏希とヴァイスは顔を合わせる。ラグナが告げた〝あの人〟が、誰の事を指しているのかを知っているからだ。
「ラグナ、アイツの事は……」
「……大丈夫だよ、お兄ちゃん。私なら大丈夫だから」
「でも……」
「どれだけ悲しんだって、あの人が戻って来る訳じゃありませんし……私がいつまでも

メソメソしてたら、あの人も天国で心配しちゃうでしょうから」
心配そうな様子の夏希とヴァイスに対し、笑顔を向けてから再び歩き出すラグナ。しかし夏希とヴァイスからすれば、その笑顔がどこか無理しているようにしか見えず、不安そうだった。
その時……

キィィィィィン……キィィィィィン……

「「――――ッ?!」」
3人の耳に聞こえて来た耳鳴り。その耳鳴りの正体を知っている3人はすぐに周囲を見渡すと、3人から少し離れた場所にある水溜まりの水面が突然グニャリと歪み出し……
『――――ブルルルルァッ!!』
「ッ……危ない!!」
「うぉわっ!?」

「きゃあ!?」
　水溜まりから飛び出したワイルドボーダーが、3人目掛けて猛スピードで突進を仕掛けて来たのだ。それに気付いた3人は慌てて左右に避けるが、突進をかわされたワイルドボーダーは即座に振り返り、その胸部の砲口からエネルギー弾を発射する。
『ブルァ!!』
「え……きゃあっ!?」
「!?　しまった……!!」
「ラグナァッ!!!」
　エネルギー弾がラグナの近くに着弾し、その爆発の衝撃でラグナの体が宙に舞う。その結果、彼女の身は橋から投げ出されてしまい、咄嗟に助けようとしたヴァイスの手も届く事なく……川の中へと落下してしまった。
「ガボ、ゴボボッ……!!」
　雨の影響で激流と化している為、ラグナは水面に上がる事もできずどんどん流されていく。川に落ちた際に水を飲んでしまったのもあってか、呼吸も碌にできない彼女は意識が少しずつ薄れていこうとしていた。
（息が……できない……ッ!!）
（助けて……お兄ちゃん……夏希さん……ッ）

（助けて……健吾、さ……ん……）

時は戻り、生と死の狭間の世界……

「「――――はぁっ!!!!」」

ベルグ変異態が差し向けたダークライダー達と、正面から相対するエクシスとディケイド。エクシスはファルシオンを、ディケイドはポセイドンとブラッドを相手取り、激しい戦いを繰り広げていた。

『愚かな、貴様等ではこの私を止められはしない……!!』

「さっきからそれしか言えないのか？　もういい加減、その手の台詞は聞き飽きたんだがな……!!」

『そうか、ならば何度でも聞かせてやろう!!』

≪ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ……ＢＬＵＳＴ！≫

「くっ……!!」

ベルグ変異態は試作品型ディエンドライバーから無数の銃弾を放ち、エクシスとディケイドの近くに銃弾が次々と降り注ぐ。何とかかわす2人だったが、そこにダークライダー達が襲い掛かり、ファルシオンは構えた長剣――無銘剣虚無（むめいけんきょむ）でエクシスの胸部を斬りつける。

『フンッ!!』

「ぐっ!?　この……!!」

≪ＡＤＶＥＮＴ≫

『『グギャウッ!!』』

『グッ!?』

エクシスは素早くカードを装填し、マグニレェーヴとマグニルナールを召喚。マグニレェーヴの放った光弾がファルシオンに命中し、磁力による反発でファルシオンの体が大きく吹き飛ばされる。しかしファルシオンは地面を転がってからすぐに立ち上がり、構えていた長剣を自身のベルトに納め、トリガーを引いて再び抜刀する。

≪必殺黙読！≫

≪抜刀！　不死鳥無双斬り！≫

『ハアァッ!!!』

『『ギャウッ!?』』

「くっ……ぐあぁぁぁぁぁぁっ!?」
ファルシオンが振るう長剣から炎の鳥が飛来し、エクシス達に襲い掛かる。それを止めようとしたマグニレェーヴとマグニルナールが弾き飛ばされ、エクシスもその一撃を喰らい大きく吹き飛ばされてしまう。

『ハァッ!!』
「チッ……ぐぉっ!?」
『フン!!』
一方、ディケイドもポセイドンとブラッドを相手に押され気味だった。ポセイドンが振り下ろして来た赤い槍――ディーペストハープーンの一撃をライドブッカー・ソードモードで防御するも、その横からブラッドが強烈な掌底を放ち、ディケイドの身を大きく吹き飛ばす。地面を何度か転がされたディケイドは膝を突いた状態にまで体勢を立て直し、ジリジリと迫って来るポセイドンとブラッドを睨みつける。

「奴め、厄介なのを召喚してくれたな……」
『『ハァァァァ……!!』』
『諦めろ人間、貴様等には何1つ勝ち目などなぁい……!!』
　更にはベルグ変異態までもがディケイドの前に立ち塞がり、背中から触手を伸ばした状態でディケイドに迫り来ようとする。それに対し、ディケイドはどこか呆れた様子で疑問を投げかける。
「わからないな。何故そこまでして現実世界に蘇ろうとする？　お前のやりたい事とは何だ？」
『私のやりたい事はただ1つ……復讐だ!!』
「何……？」
　ベルグ変異態が言い放った〝復讐〟という言葉に、ディケイドは首を傾げる。
『私はねぇ、飢えていたのさ。欲しい物を手に入れ、自分の物にする。それだけが私の心が満たされる唯一の方法だったのだよ……だというのに、奴等はそれの邪魔をしてくれた!!　奴等が私をこのような場所に追いやったのだ!!』
「……」
『だから私は決めたのだ!!　現実世界に蘇り、私は奴等への復讐を果たす!!　貴様等には、その為の贄となって貰うぞ……!!』

「……なるほど、大体わかった」
　ディケイドは両手をパンパンと叩いた後、ライドブッカーの刀身を地面に突き刺してからゆっくり立ち上がる。
『フン、ようやく理解したようだな？　私の養分となる自らの運命が』
「あぁ、理解したさ……やはりお前は、今ここで倒さなければならないという事がな」
『……ハァ？』
　ベルグ変異態はその赤い1つ目を細め、ディケイドを強く睨みつける。無論、その程度で怯むようなディケイドではなかった。
「何度でも言ってやろう……世界の為にも、お前をここから出す訳にはいかない!!」
『ほざけぇ!!　生きているお前如きが、死者の願いを踏みにじるというのか!!』
「なら、僕がそれを否定してやる!!」
『何……グオオッ!?』
『ガァッ!?』
　その時、別方向から吹き飛ばされて来たファルシオンが、ベルグ変異態と激突した。そしてディケイドの横にはエクシスが、いくらか疲弊した状態で並び立った。
「健吾……」
「……僕だって、昔は叶えたい願いがあったよ。この命に代えてでも、叶えたかった願い

が」

健吾の脳裏に、ある人物の姿が浮かび上がる。かつてミッドチルダにやって来る前、彼が命懸けで助けようとして、結局助けられる事がなかった、たった1人の家族の姿が。

「でも、僕はもう死んだ身だ。望みが叶う事は二度とない……お前も死んだのなら、その死を大人しく受け入れたらどうなんだ」

『戯言を!!　私は諦めんぞ、奴等に復讐するまでは絶対に……!!』

「……だったら、僕がそれを全力で邪魔してやる」

『何ぃ……!?』

エクシスはマグニブレードを突きつけながら、ベルグ変異態に向かって言い放つ。

「僕には、死なないで欲しかった人がいた……」

「今もまだ……幸せに生き抜いて欲しい人が残っている」

「その人の幸せを守る為にも……僕はここでお前を倒す!!!」

そう宣言すると同時に、エクシスはカードデッキから1枚のカードを引き抜き、それを裏返しカードの絵柄を見せつける。その絵柄を見た途端、ベルグ変異態は驚愕した。何故ならそのカードは、彼が生前に見た事があるカードだったのだから。

『な、そのカードは……!?』

何故だ。

何故貴様がそのカードを持っている。

動揺を隠せないベルグ変異態の前で、エクシスの周囲を灼熱の炎が覆い始める。エクシスが左腕のマグニバイザーを正面に突き出すと、マグニバイザーは炎に包まれ、狐の頭部を模したハンドガン型の召喚機――――〝狐召機甲（こしょうきこう）マグニバイザーツバイ〟へと一瞬で変化。

（！　変わった……）

エクシスは召喚機が変化した事に内心驚きつつも、マグニバイザーツバイの開かれた口に、赤く燃え盛る炎の中で金色の翼が煌めいているそのカード――――〝サバイブ・烈火〟を挿し込む。そしてカードを食べさせるように口を閉じる事で、セットを完了させた。

≪ＳＵＲＶＩＶＥ≫

エクシスはマグニバイザーツバイを下ろし、その全身が灼熱の炎に包まれ、姿が変化する。

より鋭利な形状になった頭部の狐耳。

金色のラインが増えた胸部装甲。

狐の頭部を模した両肩の鎧。

背中からマントのように生えた九本の尻尾。

そしてオレンジ色に変化したカードデッキ。

サバイブ・烈火の力により、エクシスは強化形態――〝仮面ライダーエクシスサバイブ〟への変身を完了させたのである。その横にはディケイドが並び立ち、彼の肩をポンと触れる。

「健吾、それがお前の……今回限りの新たな力だ」

「……これが」

エクシスサバイブは、自身の変化した姿に少しだけ戸惑いを示すも、すぐに感情を切り替えてベルグ変異態を睨みつける。それを見たディケイドは仮面の下でフッと笑い、自身もあるデバイスを取り出した。

「せっかくだ。もう1つ良い物を見せてやる」

≪K―TOUCH　TWENTY　ONE!≫

『なっ……まさか貴様も!?』

既に余裕を失いつつあるベルグ変異態の前で、ディケイドは取り出したマゼンタ色のデバイス――〝ケータッチ２１（トウエンティワン）〟に1枚のカードを挿し込む。そこからディケイドはケータッチ21に浮かび上がっている紋章を、指で順番にタッチし始めた。

≪W≫

≪OOO≫

≪FOURZE≫
≪WIZARD≫
≪GAIM≫
≪DRIVE≫
≪GHOST≫
≪EX—AID≫
≪BUILD≫
≪ZI—O≫
≪ZERO—ONE≫
≪FINAL KAMEN RIDE……DECADE!≫
「――――変身!!」
≪COMPLETE TWENTY ONE!≫

全ての紋章を押した後、ディケイドはネオディケイドライバーのバックル部分を取り外してベルトの右側に取り付け、ネオディケイドライバーの空いたバックル部分にケータッチ21をセット。するとディケイドの周囲に無数のカードが出現し、それがディケイドの全身を変化させていく。

ディケイドの背中にはマゼンタ色のマントが出現し、胸部と両肩、縦に伸びた頭頂部

には様々な仮面ライダーの姿を描いたカードが次々と浮かび上がっていき、更にはマントにも無数のカードが貼り付くように出現。そして緑色だった複眼はマゼンタ色に変化した事で、ディケイドは強化形態――〝コンプリートフォーム２１（トウエンティワン）〟への変身を完了させた。

「……カードだらけじゃん」

その姿を見たエクシスサバイブは思わず二度見してしまい、小さな声で突っ込む。しかし聞こえていないのか、それとも聞こえた上でスルーしたのか、コンプリートフォーム２１となったディケイド（以下ディケイドＣＦ２１）はライドブッカーを地面から引き抜き、その刀身を撫でてからベルグ変異態に言い放つ。

「さぁ、最後の戦いを始めようか」

『ッ……所詮こけおどしだ!!　行けぇっ!!』

『『『ハァッ!!』』』

ベルグ変異態の命令で、ダークライダー達が再び２人に襲い掛かる。エクシスサバイブはファルシオンに向かって果敢に駆け出して行くのに対し、ディケイドＣＦ２１はその場から動かず、自身に向かって来るポセイドンとブラッドを迎え撃つスタイルで戦闘を再開する。

「フンッ!!」

『ヌグ!?』
『ガァアッ!?』
　ポセイドンが槍を振り下ろすも、ディケイドＣＦ２１はそれをライドブッカーで高く弾き上げ、逆に強烈な斬撃を炸裂させる。そこにブラッドがパンチを繰り出すも、それを読んでいたディケイドＣＦ２１は体を後ろに反らすだけで攻撃を難なく回避し、逆にライドブッカーを突き立てブラッドを後退させる。
『グッ……おのれぇ!!』
「フッ!!」
『な、グワァッ!?』
　ベルグ変異態も背中の触手を伸ばして応戦するも、ディケイドＣＦ２１はライドブッカーを即座にガンモードに切り替え、銃弾を連射し全ての触手を押し退ける。そのままベルグ変異態にも数発の弾丸を命中させた後、ディケイドＣＦ２１はケータッチ２１に浮かび上がっている紋章の中から１つを指でタッチする。
≪ＯＯＯ≫
≪ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ……ＰＵＴＯＴＹＲＡ　ＣＯＭＢＯ！≫
　電子音と共に、ディケイドＣＦ２１の胸部装甲のカードが全て同じ物に変化。そして彼の横には、紫色のボディを持った恐竜のような戦士――――〝仮面ライダーオーズ・プ

トティラコンボ〟が出現した。
「ハァッ!!」
『グッ!? ガ、ァア……ッ……』
ディケイドＣＦ２１とオーズ・プトティラコンボは同時に両腕を広げると、そこから凄まじい冷気を放射し、その先に立っていたポセイドンを地面ごと一瞬で凍結させた。ポセイドンが完全に動けなくなった隙に、ディケイドＣＦ２１は１枚のカードをベルトの右側のバックル部分に挿し込み、オーズ・プトティラコンボもそれと同じ動作を行った。
≪ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ……Ｏ・Ｏ・Ｏ・ＯＯＯ！≫
≪プ・ト・ティラーノ・ヒッサーツ♪≫
「ハァッ!!!」
『グワァァァァァァァァァァッ!!?』
ディケイドＣＦ２１はライドブッカー・ガンモードを、オーズ・プトティラコンボは恐竜の顔の意匠がある武器――メダガブリュー・バズーカモードを構え、それぞれマゼンタ色、紫色の強烈な破壊光線――ストレインドゥームを発射。凍らされているポセイドンは当然逃げられる訳もなく爆散してしまった。
『な、何だその力は……!?』

「……フッ」

ポセイドンの撃破を確認したからか、構えを解いたオーズ・プトティラコンボが消滅。残ったディケイドCF21はライドブッカーをソードモードに切り替え、再びケータッチ21の紋章をタッチする。

「次はコイツだ」

≪BUILD≫

≪KAMEN RIDE……GENIUS FORM!≫

するとディケイドCF21の横に、今度は白いボディに無数のカラフルなボトルの意匠を持った戦士――〝仮面ライダービルド・ジーニアスフォーム〟が出現。ディケイドCF21はライドブッカー・ソードモードを、ビルド・ジーニアスフォームは中折れ式の大剣型武器――フルボトルバスター・バスターブレードモードを構えて静かに動き出す。

『させるかぁ!!』

『フンッ!!』

「……ハッ!!」

ベルグ変異態がそう叫ぶと共に、ブラッドは発光した胸部装甲から巨大なコブラのような怪物――ゼノベイドスネーカーを召喚し、2人に差し向ける。ディケイドCF2

1とビルド・ジーニアスフォームがそれぞれの武器を用いてゼノベイドスネーカーの攻撃を防ぐ中、離れた位置に立ったブラッドは自身のベルトのレバーを回転させ、必殺技を発動しようとしていた。

≪ガタガタゴットンズタンズタン！　ガタガタゴットンズタンズタン！≫

≪Ｒｅａｄｙ　Ｇｏ！≫

≪ハザードフィニッシュ！≫

≪グレートドラゴニックフィニッシュ！≫

『ハァァァァァァァッ!!』

ゼノベイドスネーカーの背中に飛び乗ったブラッドは、右手にエネルギーを収束させながら2人に迫り来る。それを見てもディケイドＣＦ２１は決して慌てず、ベルトのバックル部分にカードを装填した。

≪ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ……Ｂ・Ｂ・Ｂ・ＢＵＩＬＤ！≫

≪フルフルマッチブレイク！≫

「ハァァァァァァァッ!!」

『グッ……ガァァァァァァァァァァァッ!!?』

ディケイドＣＦ２１のライドブッカー、そしてビルド・ジーニアスフォームのフルボトルバスターから放たれた虹色に輝く斬撃――フルフルマッチブレイクが放たれ、突

撃して来たゼノベイドスネーカーごとブラッドの体を斬り裂いた。その強烈な一撃に、ブラッドは敵わず大爆発を引き起こし、跡形もなく消滅してしまった。

『ば、馬鹿な……!?』

ベルグ変異態が余裕を失った様子で呟く中、役目を終えたビルド・ジーニアスフォームが消滅し、ディケイドＣＦ２１はベルグ変異態の方へと振り向く。今のベルグ変異態にとって、その姿は自身の命を奪う死神のようにも見えていた。

「さぁ、今度はお前の番だ。覚悟しろ」

≪不死鳥無双斬り！≫
『ハッハァ!!』
「くっ……!!」
一方、エクシスサバイブはファルシオンと対峙していた。ファルシオンが長剣から飛ばして来た炎の鳥をしゃがんで回避したエクシスサバイブは、マグニバイザーツバイの先端部分から〝マグニブレイダー〟と呼ばれる刀身を伸ばし、ファルシオンと鍔迫り合いになる。
（強い……だが、負ける訳にはいかない!!）
『ヌォ……!?』
目の前の強敵を前に、彼は決して折れなかった。ファルシオンの腹部を蹴りつけ、距離を離したエクシスサバイブはマグニバイザーツバイの装填口を開き、デッキから引き抜いたカードを挿し込みセットする。
≪ＡＤＶＥＮＴ≫
『グラァァァァァァァァウッ!!!!』
電子音と共に、エクシスサバイブの後方からはマグニレェーヴとマグニルナールが融合したマグニウルペースが駆けつける。するとマグニウルペースの姿が変化し、頭部に銀色のバイザー、胴体部分に黒いタイヤ型のパーツを装備した強化形態――〝烈火の

九尾マグニテイルナー〟へと進化。エクシスサバイブの背後に立ち、咆哮を上げながらファルシオンを睨みつける中、エクシスサバイブは2枚目のカードを装填する。

≪SHOOT VENT≫

「ハァッ!!」

『グラァウッ!!』

『ヌ……グオォォォォォォッ!?』

エクシスサバイブが構えたマグニバイザーツバイ、そしてマグニテイルナーが9本の尻尾から放つ強力な火炎弾――〝テイルフレア〟が一斉にファルシオンに向けて発射される。それらを全て長剣で防ごうとするファルシオンだったが、絶え間なく飛んで来る火炎弾を完全には防ぎ切れず、数発ほどその身に受けた事で膝を突く。

≪SWORD VENT≫

「ハァァァァァァ……」

『……ッ!!』

更に3枚目のカードを装填し、マグニバイザーツバイから伸びたマグニブレイダーを赤い炎が覆われる。それに対し、フラフラながらも立ち上がったファルシオンはベルトから引き抜いた本型のデバイス――ワンダーライドブックを長剣にかざす。すると長剣に灼熱の炎が纏われ始める。

≪永久の不死鳥……！≫
≪無限一突！≫
『ハハハハハ……ハアアアアアアアアッ!!!』
「――――ハアアアアアアアアッ!!!」
ファルシオンは長剣を振るい、十字型の巨大な斬撃を放射。それを迎え撃つように、エクシスサバイブも炎を纏ったマグニブレイダーを振り上げ、２つの強力な斬撃が正面から激突する。
『クハハハハハハ!!』
「ぬ、ぐぅぅぅぅぅ……ッ!!」
ファルシオンの放った十字の斬撃が、マグニブレイダーの斬撃を少しずつ押し始める。それでもエクシスサバイブは力強く踏ん張り、１歩ずつだがファルシオンの斬撃を少しずつ押し返していく。そして……
「……おおおおおおおおっ!!」
『ッ!?』
遂にエクシスサバイブがマグニブレイダーを振り切り、ファルシオンの放った斬撃が打ち破られる。それを見て驚愕する反応を見せるファルシオンだが、そこにエクシスサバイブが跳躍して一気に距離を詰め、ファルシオン目掛けてマグニブレイダーを勢い良

く振り下ろした。
「でやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!!」
『ガ……グアアアアアアアアアアアアッ!!?』
マグニブレイダーの刃が、ファルシオンの胸部を斜めに斬り裂いた。大きく吹き飛んだファルシオンは地面を転がされた後、全身に僅かに電流が走りながらもゆっくり立ち上がる。それを見たエクシスサバイブはすぐに構え直そうとしたが……
『ハァ……ハァ……ク、ハハハハ』
「……?」
『ハハハハハ……クッハハハハハハハハハハハ!!!』
ファルシオンは長剣を構える事もなく、ただ天を見上げながら大声で笑い……そして大爆発を起こした。ファルシオンの存在が跡形もなく消滅したのを確認したエクシスサバイブは、ホッとした様子でマグニバイザーツバイを下ろす。
(倒せた、か……)
エクシスサバイブは息を整えながら、ファルシオンが先程まで立っていた場所をしばし見つめる。その後、すぐに思考を切り替えた彼は、再びマグニバイザーツバイを構え直す。
「そうだ、奴は……!!」

場所は戻り、ディケイドＣＦ２１はと言うと……

『ハァァァァァァァッ!!!』
「フンッ!!」
ベルグ変異態が両腕や背中から伸ばす無数の触手を、ライドブッカー・ソードモードの斬撃で次々と薙ぎ払っているところだった。振るわれる斬撃は大きく飛来して触手を何本も切断し、そのままベルグ変異態の元にまで届き胴体を大きく斬り裂いた。
『グゥッ……まだだ、まだだぁ……ッ!!』
「全く、随分と粘るものだな」

『黙れぇ!!　私はまだ終わらない……終わってたまるものかぁぁぁぁぁぁぁっ!!!』

ベルグ変異態は背中から伸ばした触手を変異させ、その先端から巨大な龍の頭部を形成。２本の触手から生えた龍の頭部が火炎弾を放ち、ディケイドＣＦ２１は飛んで来る火炎弾をライドブッカーで的確に弾き返していく。それを見たベルグ変異態は背中から更にもう１本の触手を伸ばし、先端に蠍のような毒針のある尻尾を形成する。

『死ねぇぇぇぇぇぇぇっ!!!』

「!?　チッ……!!」

その時……

≪ＧＵＡＲＤ　ＶＥＮＴ≫

『ッ!?』

ベルグ変異態の伸ばした尻尾が、突如ディケイドＣＦ２１を守るように発生した炎の壁に阻まれ、先端の毒針が焼かれて消失する。驚いたベルグ変異態が尻尾を引っ込める中、炎の壁が消えると共にディケイドＣＦ２１の隣にエクシスサバイブが姿を現した。

「士さん、お待たせしました」

「良いタイミングで来たな、健吾」

『こ、このクソガキがぁぁぁぁぁぁ……ッ!!』

≪ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ……ＤＩ・ＤＩ・ＤＩ・ＤＩＥＮＤ!≫

エクシスサバイブが駆けつけた事で、自身の従えていたダークライダーが全滅した事を悟ったベルグ変異態は怒り心頭な様子で、試作品型ディエンドライバーにカードを装填。その銃口を2人に向け、複数のカード状のエネルギーで形成されたターゲットサイトが狙いを定める中、ディケイドCF21も1枚のカードを装填しようとしていた。

「そっちがその気なら、こっちもだ」

≪FINAL　ATTACK　RIDE……DI・DI・DI・DIEND!≫

ディケイドCF21は右手に出現したシアン色の銃型デバイス――ネオディエンドライバーを構え、同じようにカード状のエネルギー体によるターゲットサイトが形成される。そして両者は同時にその引き鉄を引いた。

『消え去れえええええええええっ!!!』

「……ハアアッ!!!」

ネオディエンドライバーと試作品型ディエンドライバー、その両方が強力なエネルギー光線――ディメンションシュートを発射。互いの一撃が正面から激突し、拮抗し合う……かと思われたが。

『!?　グ、ゴワアアアアアアアッ!!?』

ネオディエンドライバーから放たれた一撃の方が、パワーが遥かに上回っていた。自身の放った一撃を軽々と打ち破られたベルグ変異態は、自分の身を守ろうとした2つの

龍の頭部すらも纏めて消し飛ばされ、大ダメージを受ける結果となった。
『ば、馬鹿な!? 何故だ、何故こんなにも簡単にい……!!』
「こっちの方が最新型だからな……何でアイツの武器に助けられてんだ俺は」
「? 士さん、何か言いました?」
「……いや、何でもない」
小声で愚痴を呟くディケイドCF21だったが、隣に立っていたエクシスサバイブは聞こえなかったのか不思議そうに首を傾げる。その一方、ディメンションシュートをその身に受けたベルグ変異態は疲弊した様子で膝を突き、憎悪の込められた目を2人に向ける。
『ふざけるなぁ……私はこんな所で終わるような存在ではない……私は何としてでも現実世界に蘇り、奴等への復讐を果たすのだぁ……ッ!!』
「それがお前の限界だ……決めるぞ、健吾」
「はい!!」
≪FINAL ATTACK RIDE……DE・DE・DE・DECADE!≫
≪FINAL VENT≫
『グラァァァァァァァッ!!』
ディケイドCF21はネオディケイドライバーのバックル部分に、エクシスサバイブ

はマグニバイザーツバイにそれぞれカードを装填。ディケイドＣＦ２１がフワリと宙に浮かび上がる中、エクシスサバイブの後方からはマグニテイルナーが猛スピードで疾走し、その身を変形させ始める。前足と後ろ足は胴体から取り出されたタイヤを掴む形になり、９本の尻尾は５本が複雑に折り畳まれ、残る４本がバイクのマフラーに変形。そして頭部のバイザーが目元を覆い、マグニテイルナーはバイクモードへの変形を完了させる。

「はっ!!」

『お、おのれぇっ!!　こんな所で私は……ッ!?』

　エクシスサバイブはバイクモードとなったマグニテイルナーに乗り込み、ハンドルを握り走るスピードを更に上げていく。それを見たベルグ変異態は苦し紛れに触手を伸ばし対抗しようとしたが、そんな彼の頭上で複数のカードが円を描くように並び、トンネルを形成し始める。それに気付いたベルグ変異態が空を見上げると、その先にはキックの体勢に入っているディケイドＣＦ２１の姿があった。

「これで終わりだ……ハァッ!!」

『ほざけぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ!!!』

　ディケイドＣＦ２１はキックの体勢でカード状のエネルギーで形成されたトンネルを潜り抜けていき、ベルグ変異態の頭部目掛けて必殺のライダーキック――〝強化

ディメンションキック21〃を繰り出した。ベルグ変異態も負けじと無数の触手で防御を固め、ディケイドCF21のキックを防ぎ切ろうとしたが……そのせいで、もう1人の方への注意が逸れてしまった。

『!? しまっ――――』

「おおおおおおおおおおおおおっ!!!」

『グガァァッ!!?』

エクシスサバイブを乗せたマグニテイルナーは全身に炎を纏い、巨大な炎の弾丸となってベルグ変異態に向かって突っ込んで行く。その炎の一撃――――〃ブレイジングフォックス〃はベルグ変異態の左半身を抉るように破壊し、それによりベルグ変異態の体勢が崩れる。その結果……

「ハァァァァァァァァッ!!!」

『グギャァァァァァァァァァァァァッ!!?』

触手による防御を打ち破ったディケイドCF21のキックが、ベルグ変異態の頭部に直撃。そのまま頭部を粉砕したディケイドCF21は地面に着地し、その隣にはマグニテイルナーから降りたエクシスサバイブが着地する。

『ば、馬鹿な……私は、まだ……何も……満たされて、い、な――――』

言葉はそこで途切れ、ベルグ変異態はその場で大爆発を引き起こす。その爆風を背

に、着地したディケイドＣＦ２１とエクシスサバイブは言葉を発する事なく、その場から静かに立ち上がるのだった。

「何か、言い残しておく事はあるか？」

戦いが終わり、グランセニック家の自宅へと帰還した健吾。彼は部屋のベッドで眠り続けているラグナの傍へと歩み寄り、士はそんな彼にどこか優しさを含んだ声色で呼び

かける。
「少しだけ、時間を下さい」
「……良いだろう」
「ッ……健吾、さん……」
今もなお、眠りについたまま健吾の名前を呼び続けるラグナ。そんな彼女の頭を、健吾は優しく撫でる。その様子を見ていた士は、何も言わずにトイカメラのシャッターを切る。
「大丈夫だよ、ラグナちゃん。君はまだ生きている。君はまだ、こっちに来てはいけない」
何故ラグナが生死の境を彷徨うような事態になったのか、それは健吾にもわからない。彼にできる事は、ラグナが死なない事を祈りつつ、彼女に優しく語りかける事だけだった。
「君のおかげで、僕の人生は充分に満たされた」
かつて救いたかった家族を救えず、心に大きな穴が空いてしまったまま2度目の生を受けた健吾。
そんな彼の心の穴を埋めてくれたのは、他でもないラグナだった。
彼女にはこれからも、長い人生を生き抜いて欲しい。

そんな想いを込めながら、健吾はラグナの頭を優しく撫で続けた。

「ありがとう。君に会えて良かった」

「さよなら、ラグナちゃん」

……？

ここは、どこだろう……。

何も見えない……私、どうなっちゃったんだっけ。

……そうだ、思い出した。

あの時、モンスターに襲われて、川に落ちて……。

たぶん、そのまま死んじゃったんだろうなぁ……。

私、このままあの世に行っちゃうのかな……？

ごめんね、お兄ちゃん……。

ごめんね、皆……。

『大丈夫だよ、ラグナちゃん』

……？

『君はまだ生きている。君はまだ、こっちに来てはいけない』

誰……あなたは、誰なの……？

『君のおかげで、僕の人生は充分に満たされた』

……！

もしかして、あなたは……。

『ありがとう。君に会えて良かった』

待って……！

『さよなら、ラグナちゃん』

待って、行かないで……！

健吾さん……!!

「――――ッ!?」

そこで、ラグナは意識を取り戻した。目覚めた彼女の視界に映ったのは病室の天井。

そこで彼女は、自分が病室のベッドに寝かされている事に気付いた。

「……ここ、は……」

「!! ラグナ、目が覚めたの!?」

「ラグナ、大丈夫か!! 俺の事、わかるか!?」
「……夏希さん……お兄ちゃん……?」
その時、目覚めたラグナの顔を夏希とヴァイスが覗き込んで来た。2人は安堵した表情を浮かべており、よく見るとその近くでシャマルと手塚もホッとした様子で立っていた。
「あの……私、あれから……」
「たまたま、手塚さんがあなたを見つけて助けてくれたのよ」
「見つけた時は本当に驚いた。知人が川を流されていたのだからな」
シャマルの説明によると、川に流されていたラグナをたまたま見つけた手塚が即座にライアに変身し、エビルウィップを巻きつけて大急ぎで岸まで引っ張り上げたらしい。しかし、彼が拾い上げた時点でラグナは意識がなかった為、かなり危うい状態だったようだ。
「ほんとに助かったぜ。手塚の旦那にはいくら感謝しても足りねぇ。本当にありがとう……!!」
「あ……ありがとうございます、手塚さん」
「気にしなくて良い。友人が困っていれば、助けるのは当然の事だ」
兄妹から感謝の言葉を受け、笑顔でそれに応える手塚。この時、夏希はある事をラグ

ナに問いかけた。
「ねぇラグナ。目覚めたばっかりで悪いんだけど、ちょっと聞いても良い？」
「？」
「目が覚める前のラグナ、何だか誰かの事を呼んでたように聞こえたんだけど」
「……え？」
「何か、夢でも見てたの？」
それを聞いた時、ラグナはある事を察し、クスリと小さく笑みを浮かべた。ラグナが突然笑顔を浮かべた事に、夏希達は「？」と頭にクエスチョンマークを浮かべる。
「……私、会ったんです」
「「「？」」」
そんな彼等に、ラグナは話す事にした。
自身が目覚める前に聞き取った、ある人物の声を。
「何もない、真っ白な場所で……」

「健吾さんに、会えたような気がしたんです」

少年は、再び少女と出会った。

少年は、再び少女の為に戦い、そして姿を消した。

少年の物語は、今度こそ、終わりを告げる……

END……

エクシスサバイブ設定＆ストーリー解説（ネタバレ注意！）

仮面ライダーエクシスサバイブ

詳細：サバイブ・烈火のアドベントカードをマグニバイザーツバイに装填して変身するエクシスの最強形態。基本カラーはオレンジ色と金色。ボディ各部に金色のラインが存在し、より長く鋭利な形状になった頭部の狐耳、両肩の狐の顔を模した鎧、９本の尻尾を模した背中のマントなど、狐を彷彿とさせる要素がより多くなっているのが特徴。また、カードデッキのカラーも黒色からオレンジ色に変化している。

マグニバイザーツバイのモードを切り替える事で接近戦・遠距離戦の両方を可能にしており、相手によって戦法を変えながら戦う。スペックもベルグ変異態やダークライダーを圧倒するほどにまで上昇しており、ディケイド・コンプリートフォーム２１との共闘でベルグ変異態を撃破している。

狐召機甲（こしょうきこう）マグニバイザーツバイ

詳細：マグニバイザーがサバイブの力で変化する、狐の顔を模したハンドガン状の武

装型召喚機。普段はベルトの左腰に装備される。カード装填口が2ヵ所存在しており、口の銃口部分にサバイブのカードを装填する事でエクシスサバイブに強化変身する。変身後にカードを装填する場合は後頭部のハンマー部分に装填する。後述のマグニブレイダーに変形する他、火炎弾を放つ射撃武器としても使用可能。

烈火の九尾マグニテイルナー

詳細：マグニウルペースがサバイブの力でパワーアップした姿。ボディ各部に金色のラインが追加された他、マグニウルペースの時にはなかった銀色のバイザーを装備し、胴体部分には2輪のタイヤが収納されている。

機動力はマグニウルペースの頃よりも上昇し、素早い動きで敵を翻弄する。磁石化光弾を放つ能力も健在な他、9本の尻尾から強力な火炎弾を絶え間なく連射する技も使用可能。

ファイナルベント発動時は銀色のバイザーが目元を覆い、9本ある尻尾の内5本が複雑に折り畳まれ、残りの4本がバイクのマフラーに変形した後、胴体部分から現れた2輪のタイヤを前足と後ろ足で掴む事でバイクモードへの変形を完了させる。

８０００ＡＰ。

ソードベント
詳細：マグニバイザーツバイ本体から日本刀のような刀身を展開した『マグニブレイダー』に変形させる。変形時はカードの装填を必要としない。刀身に炎を纏わせた状態で強力な斬撃を繰り出す『グリードストライク』を発動可能。３０００ＡＰ。

ガードベント
詳細：地面から巨大な炎の壁を発生させ、敵の攻撃を防ぐ『ファイヤーウォール』を発動する。その火力はベルグ変異態が伸ばした蠍の尻尾を焼き尽くすほど。４０００ＧＰ。

シュートベント
詳細：マグニバイザーツバイで照準を定めた敵に、マグニバイザーツバイとマグニテイルナーの口から発射する強力な火炎弾『テイルフレア』を同時に炸裂させる。威力が非常に高い他、連射が可能である為、相手の防御を崩した上で確実にダメージを与える事が可能。４０００ＡＰ。

ストレンジベント

詳細：特殊カードの1種。使用するとその場の状況下で一番有効なカードに変化する。作中では未使用。

ファイナルベント

詳細：エクシスサバイブを乗せたマグニテイルナー・バイクモードが全身に炎を纏わせ、敵目掛けて突っ込んで行き粉砕する『ブレイジングフォックス』を発動する。１０００ＡＰ。

さて、ここからは『ＲＩＤＥＲ　ＴＩＭＥ　仮面ライダーエクシス』のストーリーについての簡単な解説です。

Ｑ．この話を作ろうと思った切っ掛けは？

Ａ．完全にただのノリです（チュドーン

……もっとわかりやすく言いますと、一時期執筆活動から離れていたのもあって、本編側のストーリーを見直す時間が必要だったのがあります（離れていた理由は完全に作者の自業自得ですが↑）

その間になんか突然思いついたのが、今回の健吾を主役としたストーリーです。本編での生存組を主役にするとなると、どの時系列に挟めば良いかを考えるのが物凄く大変です。

しかし、既に死亡しているライダーならばどうか？

そこで抜擢されたのが健吾ことエクシスだった……という事になります。既に死亡していてミッドチルダには存在していない彼だからこそ、本編側の時系列を特に気にする事なく、今回のストーリーを執筆できました。

Ｑ．ディケイドを登場させた理由は？

Ａ．物語の舞台となる『生と死の狭間の世界』ですが、当然ながら健吾がその世界の事情なんて詳しく知っている訳がありません。
そこで、『世界の破壊者』である門矢士／仮面ライダーディケイドにも参戦して貰いました。
『仮面ライダージオウ』にて、世界の事情について「一体どこで仕入れた情報なんだ…？」と言いたくなるくらい詳しく語っている描写があった彼だからこそ、今回の役目もかなりピッタリ当てはまりました。ジオウ以降の士が便利過ぎて大変です↑
もちろん、ジオウ以降の士なのでディケイドライバーもネオＶｅｒ．となっております。

Ｑ．ベルグを黒幕にチョイスした理由は？
Ａ．ディケイドが登場する以上、それなりに強い相手が必要だと考えた中、真っ先に思い浮かんだのが『エピソード・ディエンド』のボスキャラを務めたベルグでした。
おかしいな、１８禁と言いコイツの存在も色々と便利過ぎるぞ？↑
試作品型ディエンドライバーの悪影響で暴走・怪人化してしまった彼ですが、『生と死の狭間の世界』では怪人態の姿のまま理性を保った状態で活動しています。
これは『生と死の狭間の世界』に落ちて間もない頃、本能のままに死者の魂をたくさ

ん喰らい続けて来たのが原因であり、これによって理性を取り戻した彼は「死者の魂を喰らい力を蓄えていけば、いずれ現実世界に復活できるのではないか?」という考えに至り、死者の魂を見つけては襲って喰らうようになりました。

今作ではカイジンライドどころかカメンライドまで発動できるようになっていますが、これもその死者の魂を喰らい続けた影響によるものだったり。

もしこのまま力を蓄えていった場合、もしかしたら本当に現実世界に復活していたかもしれません。

健吾、士、よく倒してくれた!

Q．ベルグが召喚したダークライダーはどういった理由で選んだの?

A．『エピソード・ディエンド』で召喚した怪人達と同様、龍騎ライダー達と何かしら繋がりのあるライダーをチョイスしました。

既に感想欄で気付いている方もいましたが、一応←にも載せておきます。

タイラント→龍騎（〝ドラゴン〟フルーツから）

ダークキバ→ナイト（コウモリ繋がり）

ポセイドン→アビス（サメ繋がり）

ブラッド→龍騎＆王蛇（ドラゴン＆コブラ繋がり）

ファルシオン→オーディン（不死鳥繋がり）
また、タイラントは原典での変身者が【牛の姿をした怪人】に変異していますので、牛繋がりで【ゾルダ】の要素も存在していたり。

Q．ベルグ変異態が繰り出した能力にも元ネタはあるの？
A．作中では触手を龍の頭に変異させたり、蠍の毒針が生えた尻尾を伸ばしたりしていますが、前者は『仮面ライダーエグゼイド』の超ゲムデウス、後者は『仮面ライダーフォーゼ』のスコーピオン・ノヴァが元ネタです。

Q．エクシスサバイブとコンプリートフォーム21を出した理由は？
A．ぶっちゃけますと、今回のストーリーで一番書きたかったのがこの2つのフォームです。
エクシスサバイブの場合、狐というモチーフから【狐火】という要素が思いつき、使わせるサバイブカードは烈火に決まりました。
使う武器や能力はほとんど龍騎サバイブと同じようなものです。ガードベントのファイヤーウォールだけは龍騎サバイブと違い、本当に炎の壁を生成していますが。
そしてマグニテイルナーの名前は、任〇堂の某ゲームに登場する、とあるキャラク

ターが由来になっていたり。
コンプリートフォーム21の場合、『ＲＩＤＥＲ　ＴＩＭＥ　ジオウＶＳディケイド』で登場したのを見て以来「こっちでも暴れさせてやりてぇ!!」と思ったのが一番の理由です。
その中で、今回召喚させたのはオーズ・プトティラコンボとビルド・ジーニアスフォームの2人。本当は他にも登場させてみたかったのですが、これ以上出すと文章量がやたら増えてしまう為、断念しました。
ちなみにネオディエンドライバーを使用したのは、かつてディエンドに敗れたベルグに対する当てつけです↑

Q．『生と死の狭間の世界』でラグナを目覚めさせなかったのは何故?
A．作中でも土が説明している通り、この時のラグナはあくまで「生死の境を彷徨っている」だけであり、本当に死んでいる訳ではないからです。もし死んでいた場合は、あの状況で目覚めていた事でしょう。
生きている土が普通に活動できてるじゃないかって?
アイツはほら、色々と普通じゃないから…（適当）
なお、当然ながら『生と死の狭間の世界』で健吾達が現実世界を守る為に戦っていた

事など、現実世界にいたラグナ達は知る由もありません。人知れず戦う仮面ライダーの要素としてピッタリだなと思い、敢えてこのような展開にしてみました。

Q．今回のストーリーの時系列は？

A．上述でも語った通り、時系列を深く考えないで執筆した為、細かいところまでは決まっていません。取り敢えず言えるのは『エピソード・ディエンド』より後で、本編第2部よりは前……という事くらいですね。

Q．士が撮った写真はやっぱりピンボケしてるの？

A．はい、ピンボケしています。しかも『生と死の狭間の世界』である為、本来なら写真を撮ったところで何も映る事はありません。

しかしそこはあの破壊者。何も映っていないはずの黒い写真に、健吾とラグナの姿が薄ぼんやりと映っています。こういう幻想的な写真を撮れるのが、ある意味で士の強みなんでしょうね。

Q．この後、士は何をしようとしているの？

A．あまり詳しい事は言えませんが、このミッドチルダでは士が関わる事になる事件

がまだ他にも存在します。既に分かり切っている事を言うとすれば、次に士が登場する時は二宮ことアビスが協力要請（という名の脅迫）をされる時です↑

今回の解説はここまでにしておきましょう。
それでは。

RIDER TIME 仮面ライダー??? in Mirror World

第1話 Shadow in the Mirror

ミラーワールド。

ありとあらゆる物が反転した不思議な世界。

生物がおらず、誰もいないはずのこの世界では、異形の怪物が無数に巣食っている。

命を持たない怪物達は、命を求めるが故に、今を生きる人間達を狙い続ける。

しかし、この謎の異世界に存在しているのは、異形の怪物だけではない。

怪物と戦う仮面の戦士は再び、人の姿をした異形と相対する事となる――――

「うぉりゃあ!!」
「ぬぉっ!?」
　ミラーワールド、ミッドチルダのとある森林内部。たくさんの落ち葉で覆われた地面を、アビスが凄い勢いで転がり落ちていく。その様子別の仮面ライダーが見下ろしていた。
「うふふ……どうしたの？　あなたの実力はそんな物なのかしら？」
　背中に孔雀のような派手なカラーリングのマントを羽織った青緑色の戦士――――〝仮面ライダーエンプレス〟が不敵に微笑みながら迫り来る中、アビスはその手に持って

いたアビスセイバーを杖代わりにして立ち上がり、仮面の下で面倒臭そうに舌打ちする。

（とんだ災難だ……漂流して来たばかりのライダーに襲撃されるとはな）

この日、いつものようにアビスラッシャー達に餌を与えるべく、ミラーワールドを散策していたアビス。しかしそんな彼が出会ったのはモンスターではなく、元いた地球から次元漂流して来たと思われるエンプレスという名の仮面ライダーだった。エンプレスはアビスの姿を見るや否や、自身の武器を携えて攻撃を仕掛けて来たのである。おまけに……

「私はいずれ、この世界の女王として君臨する身……今この場で跪けば、あなたも私の家臣として迎え入れてあげても良いわ」

（……こっちの話を碌に聞かねぇ上に、プライドも無駄に高いと見た）

この言動から恐らく、エンプレスは世界の頂点に立つ為にライダーになったのだろう。この手の人間は、その傲慢な性格故に、自分以外の人間と手を組むという考えなど存在しない。こちらの一派に引き入れるのは無理だろうとアビスは判断していた。

「断ると言ったらどうする？」

「その時は残念だけれど……ここで死んで貰うわ！」

「ッ……!!」

エンプレスは両手に装備した孔雀の羽根のような鉄扇――――〝ウイングファン〟でアビスに斬りかかり、アビスはそれをアビスセイバーで的確に防御する。すると後方に跳躍したエンプレスがウイングファンを振るうと、そこから放たれた数本の羽根が飛び、アビスの周囲の地面に着弾し小さな爆発を起こす。

（刺さると爆発する羽根か、厄介な……！）

世界の女王を目指す者として、その実力は決して伊達ではないらしい。想像よりも厄介な武器を使って来るエンプレスにアビスが舌打ちする中、何故かエンプレスも同じように「チッ」と舌打ちをしてみせた。

「それにしても本当に最悪な日。あのボンボンのクソガキ、奴隷の分際でこの私に歯向かうなんて……この報い、いずれ受けさせてやるわ……!!」

「ほぉ？　奴隷に反逆された女王か。そんな情けない女に仕えるなんぞ、ご免被りたいところだな」

「あぁ、ここにもいたわね……この私を苛立たせてくれる男が!!」

エンプレスが両手のウイングファンを力強く振るい、複数の羽根による乱れ撃ちがアビスに襲い掛かる。アビスが転がって回避し、地面に羽根が刺さるたびに爆発が起こる中……2人は気付かなかった。

２人の戦場に、ある人物が近付いて来ていた事に。

爆発音が響き渡る中、その者はただ静かに、森の中を歩いていた。
近くの地面に羽根が刺さり、爆発が起こっても、その者が怯む様子はなかった。
爆発による土煙が舞い上がろうとも、その者は何も躊躇う事なく、ただまっすぐ歩み続けた。
「……あら、誰かしら？」
「ん？」
その姿に気付いたエンプレスが動きを止め、それを見たアビスも後ろに振り向く事で、その者の存在に気付いた。２人が疑問の目を向ける中、森の中を歩き続けていたその者は、２人が見ている前で立ち止まった。
「アイツは……」
「……子供ですって？」

その者は、茶髪の少年の姿をしていた。１０代後半の、なんて事ない普通の少年……であるはずだが、アビスは薄々気付いていた。

（何だ、この感じ……これは……）

その少年が放っている、恐ろしいほどの殺気に。これと似たような殺気を、アビスは過去に感じた事があった。

「誰だか知らないけれど、可哀想な坊や。あなた、もうじき消えて死ぬ事になるわ」

どちらにせよ、普通の人間がこのミラーワールドに長時間滞在する事は不可能。目の前にいる少年も、あと数分の命だろうと。そう考えるエンプレスだったが……その考えは外れる事となる。

「……龍騎の世界のライダーか」

「何……？」

少年が呟いた一言。それを聞いたアビスが仮面の下で眉を顰める一方、少年は何処からか白いドライバーのようなデバイスを取り出し、それを自身の腰の前に置いた。

≪ジクウドライバー！≫

「ッ!?」

白いデバイス――〝ジクウドライバー〟からベルトが伸び、一瞬で少年の腰に巻き付く形で装着される。アビスとエンプレスが驚く中、少年は上着のポケットから取り出

した時計のようなアイテムを取り出し、リング状のパーツを左手の指で回転させ、上部のボタンを押す。

≪ジオウ！≫

くぐもった電子音が鳴り響き、少年がその時計状のアイテム――――〝ライドウォッチ〟をジクウドライバーの左側のスロットに装填。すると少年の背後に大きな時計のようなエフェクトが出現し、そこに「ライダー」の文字が左右反転した状態で浮かび上がる。少年は右手を斜めに向けた状態で静かに構えた後……あの台詞を口にした。

「――――変身」

≪ライダータイム！≫

「!?　きゃあっ!?」

「くっ……!?」

そして少年の右手が、ジクウドライバーのバックル部分を時計回りに回転させる。少年の周囲を時計のリングの輪のようなエフェクトが回転し、背後の時計の反転した「ラ

イダー」の文字が飛び出し、エンプレスとアビスに命中してから少年の方へと戻って行く。

≪仮面ライダージオウ……！≫

その間に、少年の全身はスーツに包まれていき、その顔が仮面に覆われる。そして仮面に反転した「ライダー」の文字が複眼として嵌まり込む事で、少年は時計の意匠を持った仮面の戦士――――〝仮面ライダージオウ〟への変身を完了させたのだった。

「何だと……!?」

アビスは仮面の下で目を見開いた。目の前に存在しているのは、自分達とは全く違う特徴を持った仮面ライダー。まさかあのコソ泥以外にも、別世界の仮面ライダーが存在していたのかと、アビスは厄介そうに目の前のジオウを睨みつけた。

「……あなた、一体何なの？　私達とは違う姿をしているけれど」

「……俺は影だ。光を失った影だ」

「何ですって？」

ジオウは右手の指先をパキポキ鳴らした後、ただ一言そう告げてからエンプレスに近付いて行く。それを見たエンプレスもウイングファンを構え直そうとしたが……この時、彼女はある事に気付いた。

（ッ……な、何これ……？）

震えている。ウイングファンを構えている両手が、ガタガタと震えていた。自分の両手が震えている事に気付いたエンプレスは、信じられないといった様子で首を何度も横に振る。

（私が恐れてる？　あんな子供を……嘘よ、あり得ない……そんな事、あり得るはずがない……!!）

自分はいずれ、世界の女王となる人間だ。

そんな自分に、恐れる物など何も存在しない。

ましてや、こんな子供相手に恐れを抱く事など、決してあってはならない。

その強過ぎるプライドが、彼女の視野を狭めてしまっていた。

「ッ……はぁあ!!」

恐怖心を無理やり払い除けるかのように、エンプレスは右手のウイングファンを振り上げ、ジオウ目掛けて勢い良く斬りかかる。それに対しジオウはと言うと、自身の頭部目掛けて振るわれて来たウイングファンを首を斜めに倒す事で難なく回避し、逆に左手で握り締めた拳の一撃をエンプレスに叩き込んだ。

「ハァ!!」

「あぐっ!?　こ、この……!!」

拳がエンプレスの顔面に直撃し、怯んだエンプレスは負けじと左手のウイングファン

で斬りかかろうとする。しかしジオウはそれを右手で軽々と叩き落とし、彼女の肩を掴んでから自身の方へと引き寄せ、その腹部に膝蹴りを喰らわせてみせた。

「がはっ!?」

「……どうした。こんな物か?」

腹部にダメージを受けたエンプレスが膝を突いて咳き込み、そんな彼女をジオウが冷徹な口調で見下ろす。その様子を、アビスは少し離れた位置で大木の陰に隠れながら眺めていた。

（間違いない……あの雰囲気、奴と同じだ……!!）

アビスの脳裏に浮かび上がるのは、数年前に自身が対峙した、黒いドラゴンの騎士。その時点で彼は何となく察していた。目の前でエンプレスを圧倒している戦士が、普通の人間ではない事を。

「ぐっ……この、調子に乗るなぁ!!」

≪ＡＤＶＥＮＴ≫

『ピュイィィィィッ!!』

「……!」

エンプレスは孔雀の羽根のような装飾が付いた杖型の召喚機――〝孔雀召杖（くじゃくしょうじょう）シャープバイザー〟の装填口にカードを装填し、彼女の背後から孔雀のような大型の怪

物――――〝シャープウイング〟が出現。ジオウに向かって複数の羽根を弾丸の連射し、ジオウは後方に下がって羽根を回避する。

「クソガキが!!　この私の前に跪けぇぇぇぇぇぇっ!!!」

「フン……!」

≪ジカンギレード!≫

　エンプレスがウイングファンを振り回し、シャープウイングと共に大量の羽根を飛ばして次々と爆発を起こす。しかしジオウは慌てる様子もなく、どこからか反転した文字で「ケン」と描かれた長剣――――〝ジカンギレード〟を取り出し、それを左手に構えて数本の羽根を弾き返す。そこからジカンギレードの持ち手上部にあるスロットに、ジクウドライバーに装填したのとは別のライドウォッチを装填する。

≪フィニッシュタイム!≫

「そんなこけおどしぃ!!」

≪ＦＩＮＡＬ　ＶＥＮＴ≫

　するとジカンギレードにエネルギーが収束し、その刀身が光を放ち始める。エンプレスもすかさずシャープバイザーにカードを装填し、その場から高く跳躍して飛び蹴りの体勢に入る。

「死ねぇ!!!」

シャープウイングが翼を羽ばたかせ、無数の羽根と共に繰り出されたエンプレスの飛び蹴り――――〝フェザーストライク〟がジオウ目掛けて放たれる。勝った。これであのクソガキは死ぬ。そんなエンプレスの自信は……呆気なく崩れ去る事となる。

≪オーズギリギリスラッシュ！≫

「――――はぁっ!!」

ズバァァァァンッ!!

「きゃあぁぁぁぁぁぁぁっ!?」

『ピュイィィィィッ!?』

ジオウが放ったジカンギレードの斬撃――――〝オーズギリギリスラッシュ〟と正面から激突したエンプレスは、その圧倒的パワーの前に打ち破られ、大きく吹き飛ばされてしまった。落下したエンプレスが何度も地面を転がされる中、ジカンギレードの斬撃はエンプレスの後方にいたシャープウイングにまで届いたらしく、その身を斜めに真っ二つにされたシャープウイングは悲痛な鳴き声と共に、跡形もなく爆散してしまった。

「ッ……たった一撃で……!?」

その一部始終を隠れて見ていたアビスは、ジオウが繰り出した技のパワーを前に戦慄する。もしあの一撃が自分に向かって繰り出されていたらどうなっていた事か。その先はとても想像したくないと彼は思った。

「あ、あぁ……嘘よ、こんな……ッ」

そしてシャープウイングが消滅したとなれば、それと契約していたエンプレスも無事では済まない。彼女のボディは青緑色から灰色に変色し、孔雀のようなマントは特徴のない無地の物に変化し、シャープバイザーも孔雀の意匠がなくなり普通の杖になり果てる。エンプレスは力を失い、ブランク体にまで弱体化してしまった。

「終わりか……？」

「ひっ!?」

ブランク体の姿で尻餅をついているエンプレスに、ジオウがジカンギレードの剣先を向けながら歩み寄る。エンプレスは先程までの傲慢な態度が鳴りを潜め、怯え切った様子で後ろに下がろうとする。

「い、いや、やめて……来ないで……ッ!!」

こんなはずじゃなかった。

金持ちの娘として生まれた彼女は、不自由のない人生を送り、才能にも恵まれてきた。

それ故に、自分は周りの人間とは違うのだと、自分は特別な存在なのだと思い込むようになった。

だからこそ、彼女は世界の頂点に立つ事を望むようになった。

そんな彼女に近付いて来たのが、神崎士郎という男だった。

『その支配欲、満たしてみたいと思わないか……？』

彼女からすれば、まさに願ったり叶ったりな展開だった。

ライダー同士の戦いに勝ち残れば、自分は女王として世界の頂点に君臨できる。

世界中のありとあらゆる全てが、自分の思いのままになる。

特別な存在である自分なら、戦いに勝ち残る事など余裕に決まっていると、彼女はそう思っていた。

しかし……現実はそう甘くなかった。

『どうしたぁ？　世界の女王なんじゃないのか、お前……！』

暴力を振るう事しか能がないと思っていた男に、成す術なく追い詰められ死にかけた。

『バッカじゃねぇのアンタ？　俺がアンタみたいなクソ女に、忠誠なんか誓う訳ないじゃん』

自分に忠実な家来だと思っていた男に隙を突かれ、反逆を起こされた。

そして気付けば自分は、どこかもわからない森の中にいた。

当初、自分はもう駄目なのかと思っていた。

自分がまだ生きているとわかり、再び世界の女王になる事を強く求め始めた。

自分に恥をかかせた男達に、復讐してやる事を誓った。

自分が今いる世界が、元いた地球とは違う世界である事など、知る由もないまま。

「う、嘘……嘘よ……こんなの、こんなの何かの間違いよ……!!」

そして今、彼女に再び死の瞬間が迫り来ようとしていた。自分の目の前で、見た事のない姿をしたライダーが自分に剣を向けて来ている。その現実を、彼女の心は必死に受け入れまいとしていた。しかし、どれだけ現実から目を逸らしたところで、今の状況が何か変わるはずもなかった。

「ッ……ふざけんじゃないわよ!!　大体何なのよアンタ!!　そんな訳のわからない姿!!　このアタシを馬鹿にしてるって訳!?」

口ではそう言っているが、その声は震えており、仮面の下では恐怖のあまり涙も零れ

落ちている。そんなあまりにも情けない今の彼女に対して、ジオウは低く冷たい声で言い放った。

「もう一度言ってやる。俺は影、光を失った影だ……そして」

「ッ……う、あぁ……あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!!」
エンプレスは逃げ出した。プライドだとか、願いだとか、そんなの事はもうどうでも良い。今はとにかく、この恐ろしい存在がいない場所から少しでも遠くへと逃げ出したかった。
しかし、魔王はそれを許さない。
≪フィニッシュタイム!≫
≪ジオウ!≫
鳴り響く電子音を聞いてエンプレスが振り向くと、彼女の後方でジオウが空中に高く跳躍し、飛び蹴りの体勢に入ろうとしていた。彼と彼女の間には、反転した「キック」の文字が無数に並んでおり、まるでターゲットとして彼女を捕捉しているかのようだった。
「終わりだ……!」
「い、いや……やめて!! 来ないでぇっ!!!」
そして……

≪タイムブレーク！≫
「ハァァァァァァァァァァァァァァァァァァッ!!!」
「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!?」
ズドオオオオオオオオンッ!!!
「くっ……!!」
　必殺のライダーキック――――〝タイムブレーク〟がエンプレスの背中に直撃した瞬間、大爆発が起こる。その凄まじい衝撃は、大木の陰に隠れていたアビスにまで及ぶほどだった。
（なんて力だ……本当に何者なんだ奴は……ッ!?）
　爆風が少しずつ収まっていき、アビスは爆発の中心部にいるジオウの姿を発見する。ジオウは左足で何かを踏みつけており、アビスがその足元に視線を向けると、そこにはうつ伏せの状態で背中を踏みつけられているエンプレスの姿があった。
「ふっははははは……！」
「う、あぁっ……あ……ぁ、う……ッ」
　無惨にもジオウに足踏みにされたエンプレスは、もはや立ち上がる気力も存在していなかった。その姿は鏡のように罅割れると共に変身が解除され、お嬢様風の衣服に身を包んだ女性の姿に戻ってしまった。

「うぁ、あっ……痛いっ……た、助け、て……ッ……死にたくないっ……死に……たく……ッ」

死に恐怖した表情で涙を流しながら、彼女は隠れて眺めているアビスに必死に助けを求める。しかしその命が尽きる時が来たのか、アビスに向かって伸ばそうとした右手は力なく地面に落ち、最期は地面に顔を伏せたままピクリとも動かなくなった。

（マズい……アレは人間じゃない、化け物だ……!!）

女相手だろうと容赦なく葬り去るジオウの冷酷性を前に、死の恐怖に駆られたアビスもまた、ゆっくりと後ろに下がり逃走を図ろうとする。しかしその前に、踏みつけたい女性に視線を向けていたジオウが顔を上げ、視線の先にいたアビスの姿を捕捉する。

「次は……お前だ」

「……ッ!!」

ジオウがそう告げた瞬間、アビスの背筋に冷たい物が走る。そんなアビスの心情など知った事ではないとでも言うかのように、ジオウは動かなくなった女性の背中からどかした左足を地面につけ、アビスに向かって1歩ずつ歩みを進め始めるのだった……

To be continued……

ｎｏｉｓｕｌｌｉ　ｇｎｉｒｅｄｎａＷ　話２第

「行くぞ……」
「ッ……くそ!!」
　エンプレスをいもと簡単に葬り、次の狙いをアビスに定めたジオウ。ジカンギレードを構えたジオウが跳躍して一気に距離を詰め、アビスはアビスセイバーでジオウの斬撃を防ぎ、鍔迫り合いの状態になる。
「フン!!」
「がっ!?」
　その状態からジオウがアビスの顔面に拳を振るい、怯んだアビスの胸部を力強く蹴りつける。蹴り転がされたアビスに向かってジオウがジカンギレードを振り下ろし、アビスもすかさずアビスセイバーで防御する。ここで、ジオウがある事をアビスに問いかける。
「教えてくれ。俺はどうしてこの世界にいる?」
「何……!?」
　何故そんな事を俺に聞く必要があるのか。疑問を抱くアビスに対し、ジオウは言葉を

続ける。
「俺は本物の俺と1つになった……なのに何故俺はここにいる？　何故俺だけがこの世界にやって来た？」
「そんな事……俺が知るか!!」
　他所の世界のライダーの事情など知った事ではない。ジオウを蹴りつけて後退させた隙にアビスは立ち上がり、振るわれて来たジカンギレードをアビスバイザーで弾き返す。しかし弾き返されたジオウはその勢いを利用して体を回転させ、ジカンギレードの剣先を畳み「ジュウ」と反転した文字が書かれた銃形態に変化させる。
≪ジュウ！≫
「なっ……ぐぁぁ!?」
　振り向いたジオウがジカンギレードから弾丸を連射し、それを胸部に浴びたアビスが膝を突く。仮面の下で苦しげに呻きながらも次のカードを引き抜こうとするアビスだったが、彼はある事に気付いた。
（!!　マズい、時間切れ（タイムリミット）か……!!）
　自身の右手が僅かに粒子化し始めている事に気付き、焦った様子でカードを引き抜くアビス。その一方、ジオウは銃形態のジカンギレードに別のライドウォッチを装填しようとしていた。

≪フィニッシュタイム！≫
≪ＳＴＲＩＫＥ　ＶＥＮＴ≫
ライドウォッチが装填されたジカンギレードの銃口にエネルギーが収束される中、アビスもまたアビスクローを装備して迎撃態勢に入る。
≪電王スレスレシューティング！≫
「ッ……はぁ!!」
ジカンギレードから禍々しい紫色をした球状のエネルギー弾が発射され、アビスクローからもエネルギーを凝縮した強力な水流弾が放射される。２つの攻撃が正面から激突して大爆発が起こった後、すぐさま追撃に入ろうとするジオウだったが、土煙の晴れた先を見て動きを止めた。
「……逃げたか」
そこには既にアビスの姿はなかった。爆発した隙に逃げられた事を察したジオウは、ジクウドライバーからライドウォッチを引き抜き、変身を解除して茶髪の少年の姿に戻った。
『『グゲッゲッゲッゲッ……』』
「……！」
その時、どこからか聞こえて来た鳴き声に少年が気付く。何処に潜んでいたのか、周

囲の木々から現れた3体のゲルニュートが、少年を取り囲み包囲する。ゲルニュート達はジリジリと少年に近付いて行き、そして3体同時に襲い掛かろうとしたが……

『『『――――ッ?!』』』

襲い掛かる直前で、ゲルニュート達の動きがその場でピタリと止まる。少年が右手をかざしただけで、ゲルニュート達は全く身動きが取れなくなってしまった。

「ミラーモンスターか……俺に従え」

少年が冷たい声でそう命ずると、ゲルニュート達は襲い掛かろうといた体勢からゆっくりと方向転換していく。そしてアビスが逃げたと思われる方角に振り向いた途端、ゲルニュート達は一斉に動き出し跳び去って行く。

「……」

その様子を見届けてから、少年は何も語らず何処かに歩き去って行く。先程殺害したエンプレスだった女性が、粒子化して跡形もなく消滅していく光景に、一切目も暮れないまま。

「はぁ、はぁ……くそ、最悪だ……ッ!!」

一方、ジオウから逃げ延びたアビスはミラーワールドから脱出し、二宮の姿に戻ってから森の中の小さな小屋に逃げ込んでいた。椅子に座った彼が乱れた呼吸を必死に整えようとする中、小屋の暖炉の近くにかけられていた小さな鏡の中から、オーディンが覗き込むように映り込む。

『お前ほどの男でも苦戦は免れないか。二宮』

「オーディン……見てたんなら初めから助けろ……!!」

『助けてやっただろう？　ありがたく思え』

アビスとジオウの攻撃が激突し、爆発を引き起こした時。爆風でお互いに姿が見えなくなっている隙に、2人の戦いを見ていたオーディンが即座に介入し、アビスを連れて瞬時に転移していた。そのおかげで二宮は命拾いする事となったのである。

「仮面ライダージオウ、とか言ったか……奴は何者なんだ……ッ!! いきなり現れたと思ったら、こっちにまで攻撃して来やがって……!!」

『私にもわからない。あの盗っ人と同じ、異なる世界のライダーである事以外はな……だが、ある程度の推測はできる。お前も感じたのだろう? 奴の異質さを』

「……あぁ」

オーディンの言葉を聞いて、二宮は静かに頷く。二宮自身も心当たりはあった。ジオウから感じ取れた、人ならざる存在だけが醸し出す事のできる威圧感を。

「あの感じを俺は知っている……リュウガと戦った時以来だ」

『そう。あのライダーも恐らく、リュウガと同じミラーワールドの存在だ。奴の姿が反転していたのも、そう考えれば辻褄が合う』

それを聞いた二宮の脳裏に思い浮かぶのは、数年前にとある事件で遭遇した仮面ライダーリュウガの姿。それと同じ威圧感を醸し出していたジオウもまた、その正体は人間ではなく、ミラーワールドの存在である事は二宮にも理解できた。

「……俺達の世界やミッド以外にも、ミラーワールドが存在しているという事なのか?」

『いくら私でも、他所の世界の事情まで知っている訳ではない……だが、仮にそうだとするならば。かつて我々がいた世界と同じ現象が、他所の世界でも起きてしまったという可能性も充分に考えられる』

「何だと?」

かつて自分達がいた世界で起きた現象……それはつまり、神崎兄妹による世界の再生。それによって再生前の世界にいた者達は弾き出され、他所の世界へと流れ着いた。

(それと同じような現象が、他の世界でも起こっていた……?)

その影響で、あの反転した姿のジオウもまた、自分達と同じように別世界から漂流して来たというのか。オーディンの告げた推測から、二宮はその結論に辿り着いた。

「あの反転した姿のライダーもまた、リュウガと同じミラーワールドの存在であるが故に、この世界に流れ着いて来てしまったのかもしれんな。ミラーワールドというのはこうもまた、不可思議な現象を次々と引き起こしてくれるものだ……』

「……奴が流れ着いて来た理由なんぞ、この際どうでも良い」

二宮からすれば、ジオウがこのミッドチルダに漂流して来た経緯など大して重要ではない。彼にとって一番の問題は別にある。

「理由はわからんが、向こうは俺達に攻撃を仕掛けて来た。今後も奴に狙われ続けるな

んて冗談じゃない」
『早急に対処する必要があるな。あれほどの実力を持つ相手だ。サバイブを使う事も視野に入れた方が良い』
「チッ……面倒だが仕方ない」
　アビスのカードデッキからサバイブ・無限のカードを引き抜く二宮。できる事ならこのような面倒事は他のライダーに押しつけてしまいたいのが彼の本音だったが、今回は自分が動くしかないと判断したようだ。
「フローレンスに伝えろ。少しの間、本来の仕事からは外れるとな」
『ほぉ？　構わないが、もう動くというのか？』
「面倒事は早い段階で解決するに限る。それに……」

「奴に好き勝手されて、例の被験体を殺されても困るからな」

それから翌日……

「はぁっ!!」
『ジュルゥッ!?』
　ミラーワールド内のとある地下の放水路。石柱が複数並び、あちこちに水溜まりが存在するこの場所で、イーラは装備したデモンバイザーから連射した矢でバクラーケンを圧倒していた。連続で矢を喰らったバクラーケンは分が悪いと判断したのか、伸ばした触手を離れた位置の石柱に巻きつけ、その場から逃げ去ろうとする。
「ッ……逃げちゃ、駄目……!!」
≪ＦＩＮＡＬ　ＶＥＮＴ≫
『ブルルルル!!』
『ジュルァ!?』
　逃がす訳にはいかないと、イーラがデモンバイザーにカードを装填し、何処からか現れたデモンホワイターが長い角でバクラーケンを一突きにし、天井にぶつける勢いで高く放り投げる。続けてイーラがデモンホワイターの角に足をかけ、高く跳躍してバクラーケンにサマーソルトキックを炸裂させる。
「はあぁっ!!」
『ジュルァァァァァッ!?』

イーラの必殺技――――ラースインパクトが直撃し、撃墜されたバクラーケンは跡形もなく爆散。爆炎の中から出現した白いエネルギー体を捕食したデモンホワイターが走り去って行き、イーラが地面に着地する。

「はぁ……はぁ……」

無事にバクラーケンを倒す事ができたイーラだったが、体力を消耗したせいでかなり息が荒くなっていた。しかし彼女が今いるのはミラーワールド。この場で休んでいては、時間切れで消滅する羽目になってしまう。

（早く、帰って……休まなきゃ……）

一刻も早くミラーワールドから脱出するべく、イーラはすぐ近くにある水溜まりまで移動しようとする……が、それを邪魔する存在がいた。

『ゲゲェ!!』

「ッ!?」

石柱の陰からゲルニュートが飛び出し、イーラに襲い掛かって来た。直前で気付いたイーラが屈んで回避するも、彼女の背後の石柱から更に2体のゲルニュートが姿を現し、イーラは取り囲まれてしまった。

「ッ……何で、こんなに……!?」

モンスターを倒した直後に別のモンスターが現れる事など想定していなかったのか、

イーラは困惑した様子でデモンバイザーを構え直す。そこに1体のゲルニュートが巨大な手裏剣を取り出し、イーラ目掛けて投擲して来た。
『グゲェッ!!』
「くっ……あぅ!?」
イーラは飛んで来た手裏剣を転がってかわし、ゲルニュート達に向かってデモンバイザーの矢を発射する。しかしゲルニュート達は高い跳躍力でジャンプして回避し、別のゲルニュートが手から放出した粘液でイーラの右足を捕らえ、引っ張られたイーラが地面に転倒する。
「げほ、ごほ……はぁっ!!」
連戦の影響で呼吸が上手くできず、咳き込みながらもゲルニュート達と戦うイーラ。飛びかかって来たゲルニュートを粘液の付着していない左足で蹴りつけ、右足に付着している粘液をデモンバイザーの矢で狙撃。粘液による糸が切れた事で右足が自由になり、再び投擲されて来た手裏剣にも矢を命中させて跳ね返すイーラだったが……
≪ジュウ!≫
「うあぁっ!?」
イーラの背中を、謎の銃撃が襲った。背中に攻撃を受けた彼女が振り向いた先には、銃形態のジカンギレードを構えているジオウの姿があった。

「ッ……あなた、は……!?」
「ここにもいたか……お前も消えろ」
≪ケン!≫
ジカンギレードを銃形態から剣形態に切り替え、ジオウがイーラに襲い掛かる。イーラもデモンバイザーで攻撃を防御するが、その背後から接近して来たゲルニュートが手裏剣でイーラの背中を斬りつけ、体勢の崩れたイーラにジオウが強烈な斬撃を喰らわせる。
「あぐっ……あぁっ!?」
地面を転がされた後、何とか立ち上がろうとするイーラだったが、既に体力が限界寸前だったが為に立ち上がる事ができない。そこにジカンギレードを剣先を向けながら迫り来る。
「終わりだ」
「……ッ!!」
殺される。そう思ったイーラは仮面の下でギュッと目を瞑り、ジオウはジカンギレードを高く振り上げる。そしてジカンギレードの刃がイーラの頭に向かって振り下ろされようとしたその時……

≪ＳＴＲＩＫＥ　ＶＥＮＴ≫

「……ッ!?」

『『グゲェエッ!?』』

真横から飛んで来た高圧水流が、ジオウを強引に押し退けた。更にイーラを取り囲んでいたゲルニュート達にも水の衝撃波が次々と命中し、ジオウの近くまで吹き飛ばされていく。

「……う?」

何が起こったのかわからず、呆然とするイーラ。一体誰が自分を助けてくれたのか知りたい彼女だったが、その前に限界が来てしまい、うつ伏せの状態で地に伏してしまう。

（だ、れ……が……ッ……）

倒れ伏したイーラは視界が薄ぼんやりとなっていき、最後はその場で意識を失ってしまった。その後、意識を失い動かない彼女のすぐ隣に、１人のライダーがシュタッと降

り立つ。
「ふう、間一髪だったな」
　アビスだった。アビスクローを装備した彼は、イーラがまだ死んでいない事を確認すると、そこにオーディンが転移して姿を現した。
「こいつを頼む」
『うむ』
　オーディンはイーラを優しく抱え上げた後、一瞬で転移し姿を消す。その後、アビスは改めてジオウ達の方へと視線を向ける。
「……ライダーを庇ったのか。どういうつもりだ？」
　立ち上がったジオウは、不思議そうな様子でアビスに問いかける。それに対し、アビスは面倒そうに口を開く。
「一応、貴重な被験体なんでな。まだ死なれちゃ困るんだよ」
「おかしな話だ……お前達はライダー同士で戦うんじゃなかったのか？」
「昔と今とじゃ状況が違うのさ。そういうお前こそ、何故ライダーを襲う？　そんな事をして、お前に一体何のメリットがある？」
　ジオウはライダーがライダーを助けた理由が、アビスはジオウがライダーを襲う理由がわからず、質問に質問で返す形になる。そこでジオウの方から、理由を明かす事と

なった。
「何故ライダーを襲う、か……俺の望みを叶える為だ」
「何？」
　願いを叶える為？
　それがライダーを襲う事と、どう繋がるというのか？
　目的と手段が結びつかず首を傾げるアビスに、ジオウはその真意を語り続ける。
「ミラーワールドでライダー同士が戦い、最後に残った1人のライダーが叶えたい望みを叶える……お前達の世界のライダーはそういう物なんだろう？　だから俺もそのルールに従っただけだ」
「……そんな事をして、本当に望みが叶うと思ってんのか？」
「叶うさ……お前達の戦いの歴史が詰まった、このウォッチがあればな」
　ジオウは腕に取り付けていたライドウォッチの内、1つのライドウォッチを外してアビスに見せつける。そのライドウォッチを見たアビスは驚愕した。
「それは、龍騎の……!?」
　ジオウが見せつけたライドウォッチ。そこに描かれていたのは、アビスがよく知る赤いドラゴンの戦士――――仮面ライダー龍騎の顔だった。
「それができるだけの力が、このウォッチにはある……俺はいずれ、最低最悪の魔王とな

る……お前達ライダーはその為の礎だ……!!」
「……なるほどな」
　アビスは腕に装備していたアビスクローを放り捨て、カードデッキから1枚のカードを引き抜く。
「お前のやりたい事は概ね理解した。お前が俺にとって、倒すべき敵だという事もな」
「……俺を倒せるつもりか？　俺に恐れをなして、逃げ出したお前が」
「あぁ、そうだな。俺はお前が怖くて仕方ない……だからこそ」
　アビスは引き抜いたカード――サバイブ・無限の絵柄をジオウに見せつける。絵柄に描かれている不死鳥が、金色の光を放ち始める。
「お前には、今ここで消えて貰わなくちゃ困るんだよ」
　≪ＳＵＲＶＩＶＥ≫
　アビスバイザーツバイにサバイブ・無限のカードを装填し、アビスの全身が水流に包まれる。それを見たジオウが銃形態に切り替えたジカンギレードで銃撃するが、その弾丸は水流によるバリアによって全弾防がれ、直後に水流のバリアが大きく弾け飛ぶ。その中からはアビスサバイブが姿を現した。
「その姿は……！」
　アビスサバイブの姿を見たジオウが驚く反応を見せ、その後ろでゲルニュート達も警

戒した様子で構える。アビスサバイブは「フゥ」と小さく息を吐いた後、アビスバイザーツバイからアーミーナイフ状の刀身――アビスカリバーを展開する。

「お前は確かに強いんだろうな……だが、所詮は幻だ。偽物は本物の存在になれはしない……違うか？」

「……ッ」

その言葉にジオウが僅かにピクリと反応を示す。それに気付いているのか否か、アビスサバイブはアビスカリバーの刃先をジオウに向ける。

「お前の存在に意味はない……偽物は偽物らしく、とっとと消え去れぇ!!!」

アビスサバイブはその場で跳躍し、一気にジオウの目の前まで距離を詰める。その動きを直前で察知したジオウはジカンギレードを素早く剣形態へと切り替え、互いの刃がガキィンとぶつかり合う。その強烈な金属音が、戦闘開始の合図となるのだった……

To be continued……

第3話　The mainning tsixe

「ハァッ!!」
　刃がぶつかり合い、甲高い金属音が鳴り響く。正面から激突したアビスサバイブとジオウの攻防は、アビスサバイブが力で押し退ける所から始まった。
「くっ……!!」
　力で押されたジオウがアビスサバイブの振るうアビスカリバーをかわし、ジカンギレードでアビスサバイブの左肩の装甲を斬りつける。しかしアビスサバイブは何事もなかったかのように振り向き、ジオウの胸部を斬りつけ、更に右足で蹴りつけ後退させた。
「お前は強い。だからこそ、最初から全力で行かせて貰うぞ」
「ぐぁっ!?」
　流石にスペックの差も影響しているのか、アビスサバイブの攻撃を受けて地面を転がされるジオウ。そのまま追撃を仕掛けようとするアビスサバイブだったが、そんな彼の眼前を巨大な手裏剣が通過した。
「雑魚共が……!!」

『『『グゲゲゲゲ……!!』』』

　まるで王様を守る近衛兵のように、ジオウの前に立ちアビスサバイブと相対する3体のゲルニュート。その内、1体のゲルニュートが再び巨大手裏剣を投擲し、それをアビスカリバーで弾いたアビスサバイブが纏めて迎え撃とうとしたその時、金色の羽根が彼等の周囲を舞った。

『『『グゲェッ?!』』』

「！　オーディン……」

『二宮、お前は奴を倒せ』

　直後、アビスサバイブの隣に出現したオーディンがそう告げてから、ゲルニュート達の相手を引き受ける。アビスサバイブは改めてジオウの方に向き直ろうとした直後、彼の背後から電子音が聞こえて来た。

≪フィニッシュタイム！≫

「ッ!!」

≪龍騎スレスレシューティング！≫

　身の危険を察知したアビスサバイブがその場から下がった瞬間、彼の立っていた場所に火炎弾が炸裂。大きな爆発が起こる中、アビスサバイブが視線を向けた先で、銃形態のジカンギレードを構えているジオウの姿があった。

「チッ……!!」

ジオウが連射して来る火炎弾をアビスカリバーで弾き、跳躍して一気に距離を詰めたアビスサバイブはそのままジオウ目掛けて刃を振るおうとするも、それを見たジオウは即座にジカンギレードを手離し、左手に持っていた物を正面に突き出しアビスサバイブの胸部に命中させた。

「ぐっ!?　何……ッ!!」

胸部にダメージを受けたアビスサバイブが怯む中、ジオウは左手で突き出した別の武器……ジオウの仮面を模したパーツが取り付けられた長剣――――〝サイキョーギレード〟を右手に、剣形態に戻したジカンギレードを左手に持ち直し、二刀流の構えを見せる。

「黙って消えるつもりはないって事か……小賢しい!!」

「……ハァッ!!」

アビスサバイブはアビスカリバーを収納し、アビスバイザーツバイを銃形態に戻してから弾丸を連射。ジオウは飛んで来る弾丸を2本の長剣で防ぎながら、アビスサバイブに向かって駆け出して行く。

『ゲガァ!?』

『無駄に手間を取らせる……フンッ!!』

一方、ゲルニュート達を相手取っていたオーディンはと言うと、向かって来るゲルニュート達を一方的に圧倒していた。瞬間移動を駆使して1体ずつ裏拳を炸裂させては、石柱に貼り付こうとした個体を金色の羽根による爆発で地面に落とし、立ち上がろうとする個体には容赦なく前蹴りを喰らわせ再び転倒させる。

『早く終わらせるとしよう』

≪SWORD VENT≫

『グゲケェッ!!』

ゲルニュートが投げて来た巨大手裏剣を右手で遠くに弾き飛ばした後、オーディンは左手で取り出したゴルトバイザーの装填口に1枚のカードを装填。それにより出現した2本のゴルトセイバーを両手に装備し、飛びかかって来たゲルニュートの体当たりを瞬間移動で回避する。

『ハァ……!!』

『『グゲキャアァッ!?』』

オーディンは連続で瞬間移動しては、1体目の胴体を斬りつけ、2体目の背中を斬りつけ、そして3体目は正面から×字にクロスして斬りつけていく。ゲルニュートは成す術なく3体纏めて爆散し、跡形もなく消滅した。

『……さて』

ゴルトセイバーを放り捨て、オーディンはジオウと戦っているであろうアビスサバイブの方へと視線を向ける。その先ではジオウと激戦を繰り広げているアビスサバイブの姿があった。

≪龍騎ギリギリスラッシュ！≫

「ハァ!!」

「チィッ……!!」

≪ＧＵＡＲＤ　ＶＥＮＴ≫

ジカンギレードから飛んで来た炎の斬撃を、水流によるバリアで相殺するアビスサバイブ。しかし水流のバリアが掻き消された後、前方にジオウの姿が見当たらない事に気付いた彼は周囲を見渡すが、真上を見上げた際に空中でサイキョーギレードを振り下ろそうとしているジオウを発見する。

≪ライダー斬り！≫

「ぐっ!?」

振り下ろされて来た一撃をアビスバイザーツバイでも完全には防ぎ切れず、左腕を僅かに斬りつけられたアビスサバイブは左腕を押さえながら素早く後ろに下がる。着地したジオウはジカンギレードに装填していた龍騎ライドウォッチを取り外し、一度地面に突き刺す。

「ッ……わからないな……そうまでして、何故お前は魔王になろうとする!?」

傷ついた左腕を右手で払うように撫でてから、アビスサバイブはアビスバイザーツバイから弾丸を放ち、ジオウはそれをサイキョーギレードで弾き飛ばしてから口を開く。

「そうでなければ、俺は何故ここにいる……？」

≪ジオウサイキョー！≫

「!?　くっ……!!」

≪ＳＨＯＯＴ　ＶＥＮＴ≫

サイキョーギレードの側面のスイッチを操作し、サイキョーギレードに付いているジオウの仮面の複眼部分が「ライダー」から「ジオウサイキョウ」の文字に切り替わる。するとアラビアン風の電子音が鳴り響き、サイキョーギレードにエネルギーが収束していく。それを見たアビスサバイブも急いで１枚のカードをアビスバイザーツバイに装填し、後方にアビスウェイバーが飛来する。

「魔王として世界に君臨する……そうでなければ、俺の存在する意味は何処にある!!」

≪覇王斬り！≫

「ッ……おおおおおっ!!」

『ギャオオオオオオオッ!!!!』

ジオウが振り下ろしたサイキョーギレードの斬撃と、アビスバイザーツバイとアビスウェイバーが放った砲撃が正面から激突。互いの攻撃が少し拮抗し合った後、大爆発が起こり両者共に体勢が崩れた。

「ぐっ……!?」

「ッ……俺は影だ……光を失った以上、俺は完全な存在にはなれない……!!」

戦闘によるダメージでよろめきながらも、ジオウはサイキョーギレードに付いていた仮面のパーツを外し、地面に刺していたジカンギレードのスロットにセット。そして引き抜いたジカンギレードの上部にサイキョーギレードを合体させ、時計の長針と短針が重なったかのような形状をした大剣――〝サイキョージカンギレード〟を両手で振り上げて構え直す。

「俺は魔王になる……魔王として、完全な存在になる……そうする事で俺は……ッ!!」

「……何を言い出すのかと思えば」

膝を突いて状態のまま、ジオウの言葉を聞き続けていたアビスサバイブ。その反応は冷淡で、下らないと言った様子で彼はフンと小さく鼻を鳴らした。

「言いたい事はそれだけか？」
「何……ッ」
「存在する意味がなければ、お前は存在し続ける事もできないのか？　実にアホらしい話だな」
「お前に何がわかる……ッ!!」
≪サイキョーフィニッシュタイム！≫
　振り上げられたサイキョージカンギレードの刀身から強力なエネルギーが放出され、形成された巨大な刃に反転した「ジオウサイキョウ」の文字が浮かび上がり始める。それを見たアビスサバイブはそれに威圧されつつも、冷静に１枚のカードを引き抜いてアビスバイザーツバイに装填する。
「何もない、誰もいないこの世界で、影である以外の存在理由が持てない……それがどれだけの苦しみか、お前にわかるものか……!!」
「お前の気持ちなぞ知った事じゃないじ、そもそも自分の存在意義なんて考えた事もない」
≪ＦＩＮＡＬ　ＶＥＮＴ≫
「そんなつまらない物に縛られてやるつもりはない……俺はただ、生きたいと思ったから存在するだけだ」

『ギャオオオオオンッ!!』

アビスサバイブはその場から跳躍し、後方から飛んで来たアビスウェイバーの背中に飛び乗る。それを迎え撃つべくジオウはサイキョージカンギレードを勢い良く振り回す。

「だったらその命……今ここで消してやる!!」

≪キングギリギリスラッシュ!!≫

真横に振るわれた最強の斬撃が、周囲の石柱を次々と破壊していく。アビスサバイブを乗せたアビスウェイバーは空中に高く移動する事でその斬撃を回避し、その後もアビスウェイバーを真っ二つにしようと巨大な斬撃が連続で襲い掛かる。

「ハァァァァァァァァァッ!!!」

アビスサバイブを乗せたアビスウェイバーがジオウ目掛けて突撃し、それを撃墜しようとジオウがサイキョージカンギレードを大きく振り下ろす。両者が正面から衝突しようとした……その時。

≪ＦＩＮＡＬ　ＶＥＮＴ≫

『ピュイィィィィィィィッ!!!』

「――――ッ!?」

突如、真横から黄金のエネルギーを全身に纏った金色の不死鳥――――〝ゴルトフェニックス〟が飛来し、ジオウが振り下ろしたサイキョージカンギレードの刀身に真横から突撃して来た。それによりサイキョージカンギレードの斬撃は軌道が僅かにズレてしまい、アビスウェイバーはスレスレで斬撃を回避する事に成功する。

「何……ッ!?」

『まだ、その男を倒されては困る』

ジオウが視線を向けた先で、オーディンがゴルトバイザーを左手に構えていた。彼がファイナルベントを発動し、ゴルトフェニックスがエネルギーを纏って突撃する必殺技――――〝エターナルカオス〟を発動した事で、キングギリギリスラッシュの軌道を僅かに逸らしたのだ。

「ハァァァァァァァァッ!!!」

「!?　しまっ――――」

少しでも隙が生まれてしまえば、後はこちらの物。そう言わんばかりにアビスウェイバーが空中でバイクモードに形態を変化させ、それに乗り込んだアビスサバイブが猛スピードでジオウに接近する。必殺技の軌道を逸らされてしまった以上、ジオウは大型の武器であるサイキョージカンギレードを振り上げるのが間に合わず……

ドゴオオオオオオオオオオンッ!!!

必殺技――――アビスインフェルノの一撃が炸裂。その衝撃は、周囲の石柱を1本も残らず破壊してしまうほど、凄まじい破壊力を誇る結果となった。

「――――終わりだな」

爆発から数十秒後。アビスウェイバーから降りたアビスサバイブは通常のアビスの姿に戻り、破壊された石柱を背に座り込む。そんな彼が見据える先には……

「ハァ……ハァ……ッ」

ジオウの変身が解除され、その場に蹲る少年の姿があった。その体は少しずつ粒子となり始めており、彼がこのミラーワールドに存在していられる残り時間（タイムリミット）を示していた。

「お前が何者なのか、それは最後までわからんままだったが……光を失ったって言うんなら、影であるお前も一緒に消えたらどうだ」

「ッ……言って、くれるじゃないか……あれだけ、恐怖に怯えていた男が……！」

「死ぬのが怖いから生きているし、死ぬのが怖いから戦っている……それで充分だろ」

「……そう、か」

粒子化が進行し、少年の姿が少しずつ薄く透明になっていく。自分が消える結末を受け入れたのか否か、少年は俯いたまま小さく笑い始めた。

「ふ、はははははっ……終わるものか……！」

「何？」

「お前達の……戦いはまだ、終わらない……ッ!!　どこまで足掻くか、見せて貰う、ぞ―

――」

少年はそう言って、笑いながら粒子となり消滅していく。少年の姿がなくなり、笑い声も聞こえなくなった事を確認したアビスは、疲れた様子で石柱に頭を付ける。

「どいつもこいつも、同じような事ばかり言いやがって……」

ふと脳裏に浮かんだのは、かつて自身が殺めた仮面ライダーの少女。彼女と似たような台詞を再度聞かされる羽目になったのだ。アビスは既にうんざりした様子でゆっくりと立ち上がる。サバイブに変身したとはいえ、流石に無傷とは行かなかったのか、少しだけ体がふらついていた。

（何もない、誰もいない世界……か）

それが、あの少年のミラーワールドに対する印象だった。

彼はこの世界で孤独だったのだろう。

だからこそ、彼は魔王となる事で、己の存在意義を見出そうとしていた。

それ故にアビスは……二宮は、その想いがまるで理解できなかった。

「永遠に存在できるのなら、別に何だって良いだろうに……」

「こんな理想的な世界から抜け出そうだなんて、まるで理解できない話だな」

アビスは時折ふらつきながらも、しっかりとした足取りで近くの水溜まりまで移動し、現実世界へと帰還していく。その様子を、近くに立っていたオーディンは静かに見届けていた。

『己の存在意義、か……』

オーディンは先程まで少年が蹲っていた場所を見つめ、小さく笑ってみせた。

『ならば私は……一体、何の為に存在しているのだろうな』

こうして、鏡の中の影との戦いは幕を閉じた。

しかし、彼等は思い知る事となる。

『お前達の……戦いはまだ、終わらない……ッ!!』

少年が最期に言い残した、その言葉の真の意味を。

「ここに、私の望む力はある……絶対に、手に入れてみせる……!!」

大きな事件の幕開けは、すぐそこまで迫り来ようとしていた……

To be continued……?

仮面ライダーエンプレス設定＆ストーリー解説（ネタバレ注意！）

宝条真姫（ほうじょうまき）／仮面ライダーエンプレス

詳細？仮面ライダーエンプレスの変身者。２１歳。大企業社長の一人娘。自分が欲しいと望んだ物は何でも簡単に手に入る環境下におり、いずれは社長の座を引き継ぐ事が約束されていたが、本人はそれだけでは飽き足らず、【世界の女王として君臨する】事を強く望むようになる。そしてある時、神崎士郎から受け取ったカードデッキで仮面ライダーエンプレスとなり、ライダーバトルに参戦した。

両親から甘やかされて育ってきた為、性格は我儘で非常に傲慢。弱者をいたぶる事を愉しむ加虐精神の持ち主で、何事においても自分の思い通りにならなければ気が済まず、一度でも自分に歯向かった者はどんな手を使ってでも排除しようとするなど器も小さい。反面、一度殺される寸前まで追い詰められると途端に泣き出す小心者でもある。

ライダーバトルにおいては、自分が戦いで追い詰めたライダーを奴隷として付き従え、複数がかりで１人の相手を追い詰めていく戦法を好んでいたが、浅倉威／仮面ライダー王蛇に対してはその戦法が通用せず、逆に圧倒された事でその場は逃走。浅倉への

復讐を誓ったが、戦闘によるダメージが残っていた為、自身が奴隷として付き従えていた1人である芝浦淳／仮面ライダーガイに反逆され、ライダーバトルから脱落・死亡した。

死亡後はミッドチルダに転移したが、転移した場所が森の中だった為、自分がミッドチルダに転移した事、自分が既にライダーバトルから脱落している事には全く気付いていなかった。その為、ミラーワールドで偶然遭遇した二宮鋭介／仮面ライダーアビスに問答無用で戦いを挑み、今度こそ自分がライダーバトルに勝ち残ろうとしたが、そこに現れた裏ソウゴ／仮面ライダージオウ（鏡像ｖｅｒ．）に一方的に追い詰められ、怖気づいて逃げ出そうとしたところを呆気なく殺害されてしまった。

仮面ライダーエンプレス

詳細：宝条真姫が変身する仮面ライダー。イメージカラーは青緑色。孔雀の意匠がボディ各部に存在し、背中には孔雀の羽根を思わせる色鮮やかなマントを装備している。

シャープウイングと契約しており、戦闘ではウイングファンを用いて戦う。ウイングファンの性能もあって、近接専と遠距離戦の両方を可能にしている。また、自身が奴隷

として付き従えるライダーと共に、複数がかりで相手を追い詰める戦法も好んでいる。

孔雀召杖（くじゃくしょうじょう）シャープバイザー

詳細：杖型の召喚機。杖の先端部分に孔雀の羽根を思わせる装飾が存在する。上部にあるスロット部分を開き、カードを挿し込んで装填する。

シャープウイング

詳細：宝条真姫と契約している仮面ライダー。青緑色の巨大な孔雀のようなモンスターで、カラフルで色鮮やかな羽根を持つ。翼を羽ばたかせる事で複数の羽根を矢のように飛ばし、刺さった羽根を爆発させる事で標的に致命傷を与える。

裏ソウゴが変身したジオウのオーズギリギリスラッシュにより真っ二つにされ爆散・消滅した。

５０００ＡＰ。

ソードベント

詳細：シャープウイングの羽根を模した鉄扇『ウイングファン』を召喚する。鉄扇は鋭利な形状になっている他、力強く振るう事で羽根を飛ばし、遠距離の敵を攻撃する事

も可能。
２０００ＡＰ。

ファイナルベント
詳細：シャープイングが羽ばたいて風を起こし、その風に乗ったエンプレスが無数の羽根と共に標的目掛けて飛び蹴りを放つ『フェザーストライク』を発動する。
６０００ＡＰ。

さて、ここからは『ＲＩＤＥＲ　ＴＩＭＥ　仮面ライダージオウ　ｉｎ　Ｍｉｒｒｏ

ｒ　Ｗｏｒｌｄ』のストーリーについての簡単な解説です。

Ｑ．この話を作ろうと思った切っ掛けは？

Ａ．はい、またノリで作りました（チュドドーン

ミラーワールド関連で何か話を作れないかなぁ～って色々アイデアを考えていた時、リュウガと同じミラーワールドの存在である裏ソウゴの存在を思い出し、「よし裏ソウゴで書こう」という安直な考えで書き始めました。もはや計画性も何もあったもんじゃないです↑

Ｑ．裏ソウゴがミッドチルダにやって来たのは何故？

Ａ．ジオウ最終話にて、ソウゴが世界の歴史を修正した事で、修正前に存在していた彼もまた、世界から弾き出され別の次元へと飛ばされました。要は手塚や夏希、二宮達と大体同じような経緯ですね。

Ｑ．エンプレスの設定はどのようにして生まれたの？

Ａ．裏ソウゴ……というかソウゴが目指していたのが【王様】だった事から、彼と同じ【世界の王になる】事を目的としたライダーを考えた結果、彼女の存在が誕生しまし

た。女性キャラで設定した理由としては、ジオウ本編にて登場した【北島祐子／アナザーキバ】が元ネタの1人だからというのもあります。

エンプレスの生物モチーフである孔雀は、七つの大罪において【傲慢】を象徴する生物の1種としてチョイスしています。

真姫の人物像ですが、ぶっちゃけますと【裏ソウゴの憐れな噛ませ犬】として生み出したキャラなので、あんまり深くは考えていません。精々「親に甘やかされて育った我儘お嬢様」程度の肉付けでも充分だろうと判断し、その他の要素は敢えて排除しました。

その結果、3話ある内の最初の1話目で登場し、1話目で退場という何ともまぁ悲しい事に←

そんな彼女の末路は2パターン。

1つは【自分が扱き使っていた奴隷に反逆される】という物。

そしてもう1つが【正真正銘本物の〝魔王〟に捻り潰される】という物。

彼女にはお似合いの最期ですね。

そして上述の設定からわかる通り、龍騎の世界で真姫を殺害したのは芝浦です。一度は彼女に負けて奴隷扱いされた芝浦ですが、プライドの高い彼がそんな現状に納得できるはずもなく、敢えて従順になったフリをして彼女の隙が生まれる瞬間を待ち続けていました。

複数がかりで挑んだにも関わらず真姫が浅倉に追い詰められたのも、芝浦が真面目に戦おうとしていなかった事が要因の1つです。

Q．エンプレスのデッキ構成が貧弱過ぎない？

A．ウイングファンが近接・遠距離の両方に対応した高性能武器となっている為、「これだけあれば他のカードは必要なくね？」と思い、特殊カードも無しにしました。むしろ、たったこれだけで何人かのライダーを追い詰めて奴隷化させている辺り、彼女自身も技量面においては割と優れている部分があったようです。それでも浅倉に勝てなかった以上、所詮はその程度の実力だったという事でもありますが。

Q．裏ソウゴが使用したライドウォッチのチョイスは？

A．龍騎はもはや言うまでもなく、オーズと電王は【メイン脚本が龍騎と同じ小林靖子さん】である点からチョイスしてみました。ライドウォッチを発動した技の内、オーズギリギリスラッシュは【オーズバッシュ】、電王スレスレシューティングは【ワイルドショット】が元ネタです。

Q．裏ソウゴがゲルニュート達を操れたのは何故？

A．実は『ＲＩＤＥＲ　ＴＩＭＥ　仮面ライダー龍騎』のスチール写真の中に、【リュウガこと裏真司がバズスティンガー達に指示を下している】と思われる写真がありまして。裏ソウゴがゲルニュート達を操った場面は、このスチール写真を元ネタにしました。

Q．ジオウ（鏡像ｖｅｒ．）がサイキョージカンギレードを使えたのは何故？

A．『ＲＩＤＥＲ　ＴＩＭＥ　ジオウＶＳディケイド』にて、通常形態のジオウがサイキョージカンギレードでキングギリギリスラッシュを発動するシーンがあったので、今回も思い切って使わせてみました。

こうでもしないとアビスサバイブとのスペック差がだいぶ大き過ぎるので、まぁ多少はね？↑

Q．二宮がミラーワールドを【理想的な世界】と称した真意は？

A．ミラーワールドはモンスターが蔓延り、人間が長時間滞在する事のできない危険地帯です。しかし同時に、それらの危険性さえなくなってしまえば、ミラーワールドは【周囲に人がおらず、静かで安心できる世界でもある】という事。

二宮は内心、そのミラーワールドに永遠に存在していられる裏真司や裏ソウゴの事が

羨ましいと思っています。だからこそ、そのミラーワールドから抜け出して完全な存在になろうとしている彼等の苦しみや想いを、二宮は全く理解できていません。

誰もいない世界に自分だけが存在しているという、常人ならば精神崩壊を起こしておかしくない世界を「理想的な世界」とハッキリ言ってのけてしまう辺り、二宮の思想はどう考えても常軌を逸しています。恐怖心が極みに極まり過ぎた結果、こんなにも恐ろしい精神構造をした怪物が生まれてしまいました。

正直、これを書いている作者も今は二宮の事が恐ろしく感じています←

Q：今回のストーリーの時系列は？

A：第2部開始からちょっと前くらいの時期になります。その為、この時点でのイヴはまだアインハルトやウェイブ達には出会っていません。

Q：3話目のラストに出てきたのは誰？

A：さぁ、誰でしょうねぇ？（オイ

今回の解説はここまでにしておきましょう。
それでは。